
クリムゾン・ガーデン

いろはのはじめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クリムゾン・ガーデン

【Nコード】

N0107BA

【作者名】

いろはのはじめ

【あらすじ】

赤煉瓦の洋館に、生まれつき靈感、超能力と呼ばれる類いの能力を持つ、ひとりの青年が住んでいた。オカルト研究の学者であった養父の死後、彼は1本の鍵を見つけた。

その鍵で開いた地下室で、彼は血塗れの少年を発見した。その少年と暮す中で、彼は様々な怪奇現象や事件へと巻き込まれていく。

01 鍵（前書き）

タイトルを選んで頂きありがとうございます。

このシリーズは、文庫本換算127ページ分程度で完結予定です。

（文章は書き上がっています。後はきちんとアップしていけるかどうか。）

つたない文章ですが、よろしくお願いいたします。

01 鍵

あの日いなくなってしまうたあの人と、今にもいなくなってしまう
そうなあなたに贈る。

封筒に入っていた1本の鍵。止まってしまった時計が、また、動き
出した。

鍵

古い扉に、鍵穴がひとつ。

鍵穴はぎこちなく鍵を飲み込んで。扉の向こうには急な下り階段。
その先には小さな部屋。その部屋の中心に置かれた金庫のような
箱。

青銅製らしい緑色の表面には、ピツシリと複雑な模様が彫り込ま
れている。

大きさは1メートル四方ほど。扉らしき場所には、取手も鍵穴も
ついていない。

なんとはなしに表面に触れてみる。冷たい金属の感触。

扉の中心に描かれたうずまきのような、薔薇の花のような模様を
指でなぞる。

「痛ッ」

指に小さな痛みが走る。彫刻部分に引っ掛けたのか、人差し指に
血が滲んでいる。

深い沼を思わせる緑のうずまき模様、赤い色が加わる。

カチャリと何かが外れる音がして、箱の扉がゆっくりと開いた。

始めに、小さく蝶番の軋む耳障りな音。

次に、扉の隙間から溢れ出す赤い色の液体。

床へと円を描くように広がっていくその液体に、思わず数歩後ずさる。

そして、室内に充満する香り。むせかえるほどの血の香り。

最後に、最後に、開ききった扉の奥に詰め込まれたモノの姿に息が詰まる。

陶器のような白い肌。

折れそうなほど細い手足。

長い髪が顔へとまとわりついている。

ガタリと大きな音がして、ソレが箱の外へと転がり落ちる。

血塗れの少年。

動く事のできない僕の前で、その体は激しく痙攣し、口からは大量の血液が溢れた。

02猫

こんな月の綺麗な夜には、どこからか呼ぶ声が聞こえる。

猫

「司、出掛けるのか。」

玄関に向かう後ろ姿は、何も答えない。

「司！」

もう一度、少しだけ声を強めて呼びかける。足音が止まり、少しだけこちらを振り返る。

窓から差し込む月明かりが、少年の影を細長く引き延ばす。司、僕がツカサと名付けた。

猫のような印象的な瞳、肩口で外側へと撥ねた黒髪、頭に巻かれたバンダナがまるで包帯のようだ。

闇に溶け込んでしまつかのような黒いTシャツと半ズボン。冬の最中だというのに、見ている方が寒気がする。

「呼んでる。だから、行く。」

そんな呟きを残して、外へと出て行く。僕は急いで後を追った。

目立ちすぎる銀髪にキャスケット帽を被り、滅多に使わないコートを羽織る。

痺れるような寒さに眼鏡が曇る。風に乗って、庭に植えられた沈丁花の香りがする。

花も木も暗闇の中、姿は見えやしないのに。

やっとの事で追いつけば、道路の隅に止まる小さなトラック。

石焼き芋のカセットテープがエンドレスに流れている。

「、、、、、、おい。」

「要。お会計よろしく!」

料金も払っていない焼き芋を頼張る司に脱力する。

「まいどあり!」

愛想良く微笑む店主に頭が痛くなる。

「夜中に勝手に出掛けたあげく、焼き芋か!行きたいなら声をかける、声を!」

「そんなに怒らなくてもさ。1個食べる?」

その料金も僕が払うんだろうが。焼き芋屋が僕の剣幕をなだめるように間に入ってきて来る。

「そうそう、そんなカリカリしないで。お姉さん。」

「、、、お姉さん?」

低い声で聞き返す僕の後ろで、司がケラケラと笑う。僕らの反応に店主が手を打つ。

「ああ、すみません。お母さんでしたか?」

「、、、、、、、、、僕は男です。」

「ええ!」

自分が身長も低めで女顔だという事は、充分理解はしているし分かってはいるのだけれど、、、。

普通に驚く店主の反応に虚しさが募る。

「すみません、お会計お願いします。」

「、、、まいどあり。」

コートのポケットに財布を入れておいて良かった。

焼き芋屋トラックから帰る帰り道、見晴らしの良い広い道路で突然司が立ち止まる。

「どうした?」

じつと道路の一角を見つめ、そちらへと足を進める。

近くの街灯の電球が切れかかって、チカチカと点滅する。僕も司

の後ろから覗き込む。

そこにあつたのは黒い毛だらけのカタマリ・ところどころぐっし
よりと赤黒く濡れている。

見開いた瞳は作り物のように一点を見つめたまま。だらりと下が
る手足。大きな黒猫の死体。

おそらく車に撥ねられたのだろう。

司はおもむろにソレを抱き上げると、うつむき加減に何度も瞬きを
を繰り返す。

「こつちだ。」

不意にそう言って、走り出す。血塗れの猫を抱えたまま。

何かを探すように時折立ち止まっては辺りを見渡す。

どのくらいの距離を走ったのだろうか、息が切れて寒さに吐く息
が白い。

たどり着いたのは、人気のないファミレスの駐車場。

「見つけた。」

1台の赤い車のボンネットを覗き込む。フロントのライトの近く
が少しへこんでいる。

よく見ると少しだけ色が違って見える。車体の赤に滲む暗く変色
した赤。

「おいっ、オレの車に何してる!」

突然後ろからかけられた声にビクリとする。感じの悪い男がこち
らを睨みつける。

「あんた、今日、猫、撥ねたる。」

止める間もなく、司が言い放つ。たまたま近くを通った車のライ
トが僕らを照らし出す。

猫の死体、血塗れの服が数秒だけ光の元に晒される。男の顔色が

変わる。

「な、なんなんだ！お前ら！、、猫が、猫が飛び出して来やがったんだ！」

自分は悪くないとでも言うかのようなセリフを、男は早口で言う
と逃げるように車へと乗り込む。

エンジンを噴かし、急発進して駐車場を出て行く。車の走行音が
遠ざかっていく。

強い風が悲しそうな声をあげながら、落ち葉を巻き上げる。

その音が突然、かき消される。

耳を塞ぎたくなるような激しいブレーキの音。

続く重い衝突音。何かを叫ぶ人の声。

「飛び出したんだから、しょうがないよね。」

司が、ゆっくりと猫をなでる。

「もう帰ろう。その子を、庭に埋めてやろう。」

僕は、コートを脱いで猫を包んでやる。すぐ近くから猫の鳴き声
が聞こえた気がした。

どこからか漂う沈丁花の香り。

いつだって忘れてはいけない。

姿が見えないからといって、ソレが存在しないとは限らないとい
う事を。

03 来客

この館は来客を拒む。館に招かれる者だけがここに訪れる。

来客

椿の花が咲いた。僕は1階のサンルームでそれを眺める。

ひとつつ角砂糖を入れた生姜湯をテーブルに置いて、安楽椅子でくつろぐ。

染め抜いたかのように見事な紅色の花びらと黄色い花弁、深い緑色の艶やかな葉の色合いが好きだ。

司は絨毯の上に寝転がって、ルービックキューブのパーツを回す。回してはいるが解く気はないのか、同じ箇所を同じ方向に回し続けている。

その手が止まり、ふと何か思いついたかのようにこちらに眼をやる。

そして、よくわからないといった様子で首を傾げた。

「パズル、解けないのか？」

「いや、なにか聞こえたような気が。」

「なにも聞こえないけど、」

音がすると思ったら、庭からかと思いいガラス戸の方を見て、言葉に詰まった。

椿の樹の前にひとりの女性がしゃがみ込んでいた。

「こんにちは。」

「！、、、、ご、んにちは。」

司が声をかけると女性は驚いたように顔を上げ、戸惑うように挨拶を返した。

その顔は涙でぐしゃぐしゃだった。

春が近いとはいえ、外はまだ肌寒い。女性は紺色のハーフコートで、僕は上着の上にコートを羽織る。

司はいつでもバンドナと半袖、半ズボンだ。

「何か、あつたの？」

「あなた達誰？ここ、どこなの？」

この屋敷の敷地にいる理由など聞かずに、唐突な質問を投げかける司の言葉に女性が不信任を示す。

僕は慌ててフォローへと回る。

「僕は要。こちらは司。ここは僕の家。」

ここに来れたという事は、、、何かあつたから、じゃないのですか？

女性は複雑な、悲壮な表情を浮かべて黙り込んだ後、視線を地面へと落とした。

落ちていた木の枝で地面に意味のないラインを引きながら、ポツリ、ポツリと話を始めた。

「私は、何をやっても全然ダメ。」

「姉さんは何でもできた。天才だった。とてもうらやましかった。」

「もう嫌で嫌で。姉さんと比べられるのが。」

「だから、、、消えてしまおう、終わりにしようって。」

「流れの速い川に飛び込んで、なのに。」

「なのに、姉さんが助けてくれて。」

「でも、姉さんは、その後、流れに、飲まれて、流されて、、、
見えなくなつて。」

女性は泣き崩れて、その後は声にならない嗚咽が続く。

椿の花が落ちる。美しい花が丸ごと一輪、首を刎ねられたように。

「私がいなくなれば良かったのに。」

「何で姉さんが死んで、私が、まだ、生きて、、、。」

遠くから救急車の音が聞こえる。悲しげなサイレンの叫び。世界が夕日の色に染まり始める。

「もう戻つた方がいいんじゃないですか？あまり長い時間ここに留まらない方がいい。」

「え!？」

僕の言葉に、女性は改めて辺りを見回す。

「私、どうやってここに来たのかしら？」

「もう、間に合わないよ。」

司の冷たい声が響く。救急車が去って行く。サイレンの音が聞こえなくなる。

「もう終わり。でも、喜ぶべきかな？」

もう姉さんと、比べられる事も、罪の意識に苛まれる事も、ないから。」

「それってどういう事？」

「、、、。」

「、、、。」

黙り込む僕らの前で、女性の姿がだんだんと薄くなり、後ろの椿が透けて見え始める。

「そんな、そんな、、私、まだ、死」
声はそこで途切れ、女性の姿も完全に消え去った。まるで不思議の国の猫のように。

どこかの病院でひとりの女性の心電図が平行線に変わる。枕元には椿の花。

椿の花が落ちる。また一輪。

夕暮れに染まるサンルームには、完全に色の揃ったルービックキューブと冷たくなった生姜湯のカップ。

「要、間に合わないとわかった時はどうすればいいのかな？」
めずらしく寂しげな司の言葉に、少しだけ違和感を感じる。

今日の女性の事なんて自業自得だと言いつつなものの。

「僕らだってなんだってできる訳じゃない。できるだけの事をするだけだよ。」

「そう、、だよね。」

そしておもむろに顔をあげて、満面の笑顔を浮かべる。

「要、ベランダに布団干しっぱなしにしたの忘れてた。もう夕方だしこの寒さじゃ布団はヒエヒエだね。」

「な、なんてありがた迷惑な！間に合わなくなる前にどうにかしろ！」

椿の花が落ちる。また一輪。

去年も今年も来年も変わらずに繰り返される事にどれだけの意味があるのか。

僕は太急ぎで布団を取り込みに行く。なにもできないのなら、考えたって仕方ないだろう。

そう言っただけで過去から逃げないと、今に押しつぶされてしまうから。

04 路地裏

朝は目玉焼き、昼は卵焼き、夜は茹で卵。365日、同じメニュー。

路地裏

「要」

司が僕の名を呼ぶ。

「卵、飽きた。他の料理は作れない？」

遅い昼ご飯の卵焼きを突ついていた箸の片方が、左手から転がる。頭にはバンダナ。珍しくオーバーオールだ。

「他の料理？」

食卓に転がった箸を拾ってやりながら、考える。

利き手は左らしいが、持ち方は適当で手つきはおぼつかない。よくよく考えてみれば、養父であった教授が死んでからは、他の料理を作った覚えがない。

「何が食べたい？」

司は、少し難しい顔で黙り込んだ後、

「いつもの、メニュー以外。」

「卵かけご飯と、かき玉スープ。いや、オムライスにするか？」

「要、、、、、、いつもの、食材以外の料理で。」

僕は司を連れ、街に買い物に出掛ける事にした。

いつの間にか、建て変わった家々やお店を横目で見ながら街を歩く。

見事に咲いた木瓜の枝には、鈍い色のウグイスが一羽。

さえずる事を忘れたかのような悲しい眼をして枝にとまっている。料理を作るのに、街に買い出しに行かなければいけないのは、い

つもの食材しか家にないからだ。

普段は、通販で食材を宅配してもらっている。宅配は一週間後だ。街を歩けば、よけいなモノも眼に入ってきてしまう。

サラリーマンの肩に乗る髪長い女性、橋の欄干に紐1本でぶら下がる男性。

公園のブランコを揺らす影のない少女。普通の人には見えない人達。

彼らに気づかないフリをしながら、足早に通りすぎる。

司は気にしていないようだが、直前で避けて通るあたり、やはり見えてはいるようだ。

墓地の近くを通らないように迂回した細い路地で、別の意味で危険な人達に遭遇した。

路地の途中で、黒服の男達に周りを囲まれた。

多少の（人間以外に対する）リスクは覚悟して家を出たのだが、自分の運のなさに悲しくなる。

男達のリーダーらしき赤毛の男が、こちらへと1歩踏み出す。

「おい、銀髪の姉ちゃんとガキ。怪我したくなかったら財布出しな。」

ギリリツと自分の歯が噛み締められる音が聞こえた。「姉ちゃん」という言葉に心がざわめく。

「僕は、男ですから。」

心をかみ殺しながら、低い声でそう告げる。

「下手な嘘なんてついたって無駄だよ。なんならここで脱がしてやるつか？」

男達の間で笑い声があがる。

「すっげえ体細え、ウエストいくつ？」

「その眼鏡、せつかくの美人がもつたいたない。コンタクトにしなよ。」

「色白に銀髪つてセクシー！モデルでもやってんの？」

男達が口々に勝手な事を言う。

「さあ、おとなしく金出しな。」

赤毛の男の右手が、強引に僕の肩を掴む。

「触るな！！」

自分の声が震えて、遠い過去の記憶がフラッシュバックする。

白い部屋、激しく揺れる視界、台所、そして、激しい痛みと、

赤い、赤い、嘘のように赤い。

その後の事はよく覚えていない。

気がつけば、路地裏に立っているのは僕と司だけ。周りには、男達がすべて倒れている。

周囲をぼんやりと眺めながら、拳に付いた血をハンカチでぬぐう。

「要、強いね。」

「、、、買い物しに行かないとな。」

僕は司の言葉を無視して、その先のスーパーへと向かう。

食材を買って、別の道を通って家へと帰った。夕飯は、カレーライスにした。

ウグイスはいつあの鳴き方を覚えるのだろうか。

弟が、もうここにはいない弟が、カレーが好きだった。

カレーの作り方を教えてくれたあの人も、弟も、もういないのに。

僕はまだこの世界でカレーを作る。

05 桜の夢

走っても、走っても、逃げられない。迫りくる刃物から、逃げられない。

桜の夢

誰かに追いかけられる焦燥感、視界の端をちらつく刃物。

耳に残る誰かの叫び声、迫る靴音。突然の焼け付くような痛み、視界を染め上げる赤。

そして痛みよりも怖いモノがやってくる。刃物を握る影は暗闇でよく見えない。

笑いに歪む口元だけがやけにリアルで、何度も振り下ろされる刃物。声はもう聞こえない。

熱いものが込み上げて、激しく咽せ込む。視界に赤や白の点滅が走り、風景がぼんやりと滲む。

見上げた先に広がる桜が綺麗で、とても綺麗で。体の感覚がだんだんとなくなって、、、突然視界にノイズが走る。

放映の終わったテレビのような砂嵐と共に大音響で雑音が鳴り響く。

風呂に沈められたような息苦しさにもがき、、、そして目が覚めた。

ぼんやりと眼を開けると、暗闇で枕元に立つ人影。

「要、生きてる?」

誰かの声が聞こえる。

「要!」

切羽詰まった声と共に激しく体を揺すぶられる。

その衝撃にだんだんと意識がはつきりとしてくる。

「司？」

「要！」

「、、、だ、大丈夫、大丈夫だ、、、ちょっと嫌な夢を見ただけで。」

月明かりに照らされた、今にも泣き出しそうな要の顔にこちらの方が戸惑う。

僕の寝間着を握りしめる小さな手に、手を重ねると自分の手の冷たさにゾツとした。

そして、今更ながら司の格好に気づいた。

完全な裸。寝る前に寝間着を着せたはずなのにすべて脱ぎ散らかしてある。

この癖だけは何度言っても直らない。

「司、ひとまずなにか着る。」

「、、、馬鹿には、見えないパンツ。」

「却下。」

即座に否定しておいた。

「おはようございます！朝一番！とれたてニュースフラッシュュー！！」
テレビの中で、若いアナウンサーが勢い良く喋る。

「、、、おはよう、ございます。」

司がやる気なく、ブラウン管の中のアナウンサーに挨拶を返し頭をさげる。

本気でやっているのかボケでやっているのか判断に迷い、何も突っ込まないでおく。

いつものバンダナのかわりに頭にタオルを巻いて、素肌にパーカー、下はトランクスのパンツのみ。

僕は寝間着のまま、細かいストライプの濃紺のパジャマ。

少し前に煎れたぬるいダージリンの紅茶に口をつける。

僕は教授の部屋の来客用ソファに腰掛け、普段は見る事のないテレビの画面を眺めている。

トップニュースは殺人事件。若い女性の刺殺体が発見されたらしい。

テレビ画面に映る桜、桜並木。現場に残る赤いシミと白いチョークの跡が生々しい。

犯人は見つかっていない。

「こういう事、前にもあったの？」

司の言葉に現実引き戻される。

「まあ、年に1、2回ぐらいは。でも、、殺されるのは初めてだ。」

自分で言っていて、奇妙な気分になる。

殺されるにしても、自然に死ぬにしても、死ぬのは人生に一度のはずなのに。

瞼の裏に残る桜並木。夜空に散り行く桃色の花びら。あの桜は昔見た事がある。

教授と手を繋いで歩いた並木道。

「それより、そろそろ朝ご飯にしないと。今日はお前も食べるだろ。」

話題を変えようと思い、極力明るくかけた言葉を司が遮る。

「犯人捕まえないと、また、殺される。」

わかつている。でも、関わりたくない。考えたくない。怖い。犯人とは会いたくなんか無い。

僕は聞こえないフリをして、足早に台所へと向かった。

06 桜の下

怖い。恐ろしい。犯人なんてどうでもいい。知らない誰が今日も殺されるのだとしても。

桜の下

『はんにん さがしてくる』

夕食の後、風呂からあがり部屋に戻ると、つたない字で書かれたメモが机に置いてあった。

部屋に司の姿は、ない。玄関の靴もなくなっている。僕は、苦い思いで古い記憶を探る。

あの時、あの夜通った道。あの時の教授の言葉。視界が回る。嫌な汗に視界が歪む。

カタンツ。小さな音に引きずられて意識が現実へと戻る。

木製の棚の引き出しがひとつ引き出されている。中にはこの屋敷近辺一帯の地図が入っていた。

右、直進、左、右、入り組んだ通りの角を最短ルートで走り抜ける。

息が切れて苦しくなる頃、目的の場所へとたどり着いた。夢のようにとどこまでも続く桜並木。

その途中に見知ったシルエットが眼に入り胸を撫で下ろす。

「司！良かった、無事だった。」

「、、、要。」

司は、酷く驚いた様子でこちらを見上げる。

そして、今まで見つめていたらしい、通りの向こうへと視線を戻す。

桜並木の先、遙か遠くに2人分の人影が見える。

「今、女の人、、、来てる。、、、たぶん、この後、、、」
そこまで言って、口を閉ざす。続く言葉が容易に想像できて、足が震える。

司が僕の顔をじっと見上げる。

「止めてくるから、待ってて。」

司が走り出す。僕は、僕は、逃げ出したい気持ちを押し殺して後を追った。

満開の桜がどこまでも広がる。

月のない空は深い紺色で、振り上げられたナイフの刃が、月明かりに輝く。

ナイフの先の女性の後ろ姿は、桜に見入っているかのようにその場から動かない。

「危ない！」

とつさに叫んだ声に、ナイフを持った男がこちらを振り返る。

男のナイフに気づいた女性が、小さく悲鳴を上げる。

「貴様！よくも、邪魔しやがって！」

怒りを露に、男がこちらへと走ってくる。マズイ、そう思っても体は恐怖で石のように動かない。

眼を瞑る事もできない。男の姿が目前に迫って、司が僕を庇うように前に出る。

桜の花が舞い散る中で、ナイフが振り上げられて、、、そのまま停止した。

男は呆然とした表情で固まっていた。

男の後ろには、血塗れの女性が立っていた。昨日殺された女性だ、直感的にわかった。

女性は、片手でナイフを持った男の手首を押さえ、もう片方の手で男の首を握っていた。

男の耳元に顔を寄せ何かを呟いたようだが、声はここまでは聞こえなかった。

男は顔面が蒼白へと変わった。

ゆっくりとナイフが、男の首筋へと当てられ勢いよく横へと引かれた。

首の骨を擦る鈍い音と、まるでスプリンクラーのように鮮やかに溢れ出す鮮血。

口からもゴボゴボと血が溢れ、喉からはヒューヒューと悲しい呼吸音がした。

その後、どうやって家に戻ったのか、よく覚えていない。

ただ、次の日のテレビに、女性を刺殺した男が桜の下で自殺したというニュースが流れていた。

07 天井

ベットの横で、教授が僕の手を握る。脈を測るために。研究対象への冷たい視線と温かい体温。

天井

桜並木へ出掛けた後、僕は熱を出して寝込んだ。

窓の外、空は青く澄んで爽やかな風が時折カーテンを揺らす。

「何か欲しい物、ある？」

司が、替えの冷却シートを持って部屋に戻ってくる。今日は、バランダを結んでいない。

忘れたのか。そんな事をぼんやり考えている間に司がブツブツ言いながら近くまで来る。

「欲しい物と言えば、猫型万能ロボットか？いや要の場合3m高枝切りバサミか？いや添い寝用クマちゃん抱き枕か？」

「平気、水だけあればいい。勝手に変なものを注文するなよ。」

ほとんど外出ししない都合上、日用品は大抵WEBで発注して宅配して貰っている。

司にも、衣料や日用品は勝手に好きに買わせているが、たまになんだかわからない物が届く。

袖机に置かれたガラスの水差しとコップの水が、日光でキラキラと光るのが綺麗だ。

「そういえば、ちゃんにご飯食べたか？」

普段の食事はすべて僕が作っている。司は料理が作れるのか？

「、、、 適当に食べてる。」

少し視線をそらしてのセリフに、多少の不安を感じたものの、まあ何日かくらいは大丈夫だろう。

見上げた天井の白さに、悲しい気持ちになる。小鳥のさえずりが遠くから聞こえる。

そろそろ、庭の蓮花が咲く頃だろう。

要が、寝込んだ。こんな時どうしたらいいのか、よく、わからない。

ただ、胸がソワソワする。ベット横には休まらないだろうと、寝室を後にした。

食事は面倒なので食べなかった。要は言い訳に気づいているだろうに、何も言わなかった。

それより、何か食べようかと思って開けた冷蔵庫の中身に驚いた。冷蔵室には、食品とは分けてあったが大量の薬品が保存してあった。

薬品名はドイツ語や英語で書かれていた。

消毒液、麻酔、精神安定剤が多数、それによくわからない名称の液体が小さい瓶に分けてある。

冷凍室には、たくさんの冷却シートが入れてあった。

「教授、、、か。」

おそらく、これらは要が教授と呼ぶ人物が使っていたもの。いや、使わせていたもの。

いつもなら、昼食を食べて午後にくつろぐリビング。今日はリビングが広すぎて落ち着かない。

要は、窓の外を見ていた。何となく、要の見ていた方向、中庭へと足が向いた。

体が浮遊するような感覚を伴って目が覚めると、ベッドの端に司が座っていた。

水差しの横に、コップが一つ増えていた。コップには白い蓮花の花が適当に数本差してある。

「花かんむりでも作ったら、似合いそうだな。」

司が笑う。

「女の子じゃないんだから。」

「でも、残念な事に、作り方がわからん。」

「今度、教えようか？」

「熱、下がったらな。」

「熱、下がったらね。」

僕の手を握ってくれた教授はもういない。でも、大丈夫。今は司がいる。

あの人が教えてくれた花かんむりの作り方を、今度は僕が司に教えよう。

この館には、僕ら以外にも住んでいる者がいる。

黒

春の風が吹く。

春一番は、もうとっくに過ぎてしまったけれど、激しい、だけど爽やかな風が吹きすさぶ。

シャツが、洗濯物が風にはためく。慎重に洗濯バサミをとめながら、青空を眺める。

遠くを千切れ雲が凄スピードで流れていく。銀髪が風に煽られる。

眼鏡は落とさないよう銀のチェーンを付けてある。

ワインレッドのエプロンに、袖口はめくってバンドでとめておく。

「要、これ、ここに干していい？」

「ああ、頼む。」

この前、3日はかり寝込んでから、司はたまに家事を手伝ってくれるようになった。

流石に3日間も食事など家の事をやりくりするのが大変だったらしい。

今日はバンダナの代わりに手ぬぐいを巻いている。なんだか和風だ。

それはおいておいて、司が起きている時間も少しずつ長くなってきている。いい傾向だと思う。

ただ、心配な事もある。司が目覚めてから目に見えて、普通ではない現象が増えてきている。

元々自身の体質や屋敷の性質上、以前からよくある事ではあったのだけれども。

それでもここ数年は教授の努力も実り、減ってきていたはずなのに。

「要、あれ、」

洗濯物を干す手を止めて、司が草むらの方を指差す。

草むらから、一匹の黒い猫がこちらを伺っている。

なんだか姿を見るのがひどく久しぶりな気がした。

「あれは、クロ。ずいぶん前からここに住んでいる猫だ。」

「猫？」

司が首をかしげて聞き返す。確かにクロはぱつと見、猫らしくない。

まず、体がやたらと大きい。中型犬ぐらいある。しかも、頭がやたらと大きくて丸い。

逆に目はやたらと小さくて離れている。

そして、口は左右に裂けるかと思うほどパツカリと開いている。

「一応、、あれでも猫だと思う。」

改めて良く見ると、自信がなくなってくる。

「要が、飼ってるの？」

「いや、屋敷の敷地内で勝手に暮してる。小鳥とか食べてるんだと思う。」

「へえ。呼んだりしたら、こっち、来るかな？」

「ああ、呼べば来る事は来るんだが、、」

「おーい！」

止める間もなく、司がクロに向かって手を振った。

マズイ！マズイ！マズイ！クロの目がキラリと光って、猛烈なスピードでこちらへと迫る。

異常に細くて長い手足がシャカシャカと素早くコミカルに動く。

クロは司に駆け寄ると見せかけて、直前で向きをこちらへと変えた。

「え？」

クロは僕の手前で見事に、2メートル近く跳び上がった。
「なっ！！！」

青空に浮かぶ太陽が、猫の大きな影に隠れて見えなくなる。落下
予測地点は、、、僕の上。

「ちよつと待て！！！」

クロが大きな口で、ニヤリと笑った気がした。

激しい衝撃と共に視界が回って、バランスを失って後ろへと倒れ
込んだ。

足下は一面のクローバー。思いのほか痛くなくて、少し安心する。

「コイツ、呼ぶと飛びつくから。」

クローバーまみれで、クロの下敷きになりながらもなんとか上半
身を起こす。

「へえ。」

司がクロの頭に手を伸ばし、無造作に撫でる。その行動に一瞬ヒ
ヤリとする。

クロは耳をピクピクさせるだけで、撫でられるままになっている。
長い尻尾はゆらゆらするだけで、うれしいのかそうでないのかは
よくわからない。

「クロに気に入られたみたいだな。」

「そうかな？」

クロには、噛みつき癖がある。不審者に対しては、問答無用で追
いかけてまで噛みついてくる。

顔見知りや教授に対しても、一定以上近づけばかならず噛みつい
てきた。

今までにない事だ。やはり司は何か特別なのか。それとも僕と同
じ扱いなだけなのか。

チエーンのおかげで落とさずにすんだ眼鏡を、壊れていないか確認しつつかけ直す。

春風に、クローバーが揺れる。四葉のクローバーが、幸せを呼ぶのなら。

こんなにもいっぱいの三葉のクローバーは僕に何を呼び寄せるといつのか。

春風が激しく吹く夕暮れ時。ある少女の元に、差出人不明の小包が届いた。

丁寧に梱包された箱の中には、溢れんばかりのクローバー。その中に隠れるかのように入れられた、小さな小瓶。

クローバーによって届けられた少女の運命を僕達を知るのは、もう少し後の話。

09 贈り物

親愛なる君へ。夢を叶える素敵なプレゼントを。

贈り物

毎日、ヴァイオリンの練習。毎日、毎日、毎日、何時間も続く厳しい練習。

でも、わたしは幸せだったの。わたしはいつもコンクールで優勝、一番だった。

大人には敵わないけれど、同じ年代の子供の中では一番上手にヴァイオリンが弾けた。

お父様もお母様もみんな褒めてくれた。だから、わたしは幸せだったの。

あの子が来なければ。

あの子は、イギリスから帰国子女として日本に帰ってきた。とっても綺麗な黒髪のお人形さんみたいな女の子。

すごく礼儀正しくて、誰よりも可愛くて、誰よりもヴァイオリンが上手で。

大人のプロの人なんかよりもずっと上手で。わたしはとても敵わなかったの。

それから、わたしはいつも二番目になってしまった。いつも、いつでも。

お父様もお母様もみんなもあの子の事ばかり褒めて、わたしは悲しかった。わたしは悔しかった。

だから、ヴァイオリンを練習したの。前よりも真剣に。ずっと長

い時間をかけて一生懸命。

なのに、どうしてわたしはあの子に勝てないの？わたしのほうががんばっているのに。

どうすれば、あの子に勝つ事ができるの？

そんなある日、不思議な小包がわたしの元に届いたの。

小さなクローバーの葉っぱに包まれた小さな小瓶。

小瓶の中には、赤い綺麗な色のキャンディが詰まっていて、小さなラベルには「dream」の文字。

前はよくみんなからご褒美とかプレゼントとか貰えたけど、最近はそのような事もなくて。

なんだか嬉しくて、お母様には言わないでこっそり小瓶をポケットにしまったの。

次のコンクールの演奏の前、なぜだかとってもそのキャンディが食べたくなくて。

待ち時間にひとつだけ食べてみたの。キャンディは甘くてちょっぴり苦いような不思議な味がした。

ステージに上がり、お辞儀をひとつ。いつもと同じように演奏を始める。

なのに私のヴァイオリンからは、すばらしい旋律が溢れ出したの。演奏が終わった後は、拍手喝采が鳴り止まなくて、わたしはわたしは信じられない気分。

これは夢かもと思って左手をつねってみたけれど、やっぱり痛くて。

嬉しくて泣き出してしまったの。コンクールは優勝だった。お父様もお母様もみんな褒めてくれた。

やっと、わたしは幸せを取り戻せたの。

コンサートが終わった後、あんな音が出せたのが信じられなくて、ひとりでごっそりヴァイオリンを弾いてみたの。いつものわたしのヴァイオリンの音。

何度弾いてみても。

せつかく一番に戻れたのに次はまただめかもって悲しくなったの。その時機の上の小瓶が目に入って、もしかして演奏の前に食べた赤いキャンディ。

あれのおかげかもなんて考えて、もう一度キャンディを食べてみたの。

そして、ヴァイオリンを弾いてみたら、。。。

その次のコンクールでも、その次の次のコンクールでも。

わたしは赤いキャンディを食べて、すばらしい演奏を披露したの。毎回優勝だった。

毎回みんなが褒めてくれた。幸せだった。

でも、それも長続きしない事に気づいたの。だんだんに少なくなっていくキャンディ。

キャンディがなくなってしまうたら、わたしはまた二番目になっってしまう。

どうしよう、それだけは絶対に嫌。

そうだ、あの子がいなくなればいいのよ。

あの子さえいなければ、キャンディなんかなくてもわたしは一番になれる。

コンクールが終わり、キャンディがなくなってしまった後、あの

子をビルの屋上に呼び出したの。

そして、後ろから思いつき突き飛ばして、あの子の姿が屋上から消えた。

うん、これで大丈夫。

急いで控え室に戻ったら、部屋に見知らぬ男の子がいたの。手には小さなクローバーの花束。

「もしかして、あなたがキャンディをくれたの？」

男の子はクスクスと笑いながら言う。

「ああ。君にはいろいろと面白いモノを見せてもらった。とても楽しかった。」

パチパチと小さくゆっくりと手を叩く。

「な、何の事よ？」

「でも、もう夢は終わり。目が覚める時間だよ。」

その声を聞いている内に、なんだか苦しくて身動きがとれなくなつて。

男の子の両手がわたしの首に伸びて、その後の事はよくわからな
い、

よくわからないの。

10 手紙

モニタの向こうの人は、僕の事を知らない。僕も相手の事を知らない。

手紙

「 だれか たすけて 」

ぴろりん。ノートパソコンのメールフォルダに、奇妙な題名のメールが舞い込んだ。

今日は朝から大雨の続く昼下がり。司は後ろのソファで昼寝中。ウイルス付きでないのを確認して、ダブルクリックでメールを開く。

「 だれか ぼくを たすけて こから だして 」

誤字まじりのつたない文章。いたずらかはわからない。しかし、関わらない方が身のためだろう。

メールをゴミ箱マークへと突っ込んで、『削除』を選択する。メールは一瞬で消えた。

それから、来週分の食料品と生活必需品をWEB上で発注する。最後に発注先からの注文確認メールを確認するため、メールソフトで受信をかける。

「 だれか たすけて 」

確かに消したはずのメールが復帰している。

ぴろりん。注文確認メールに混じって次のメールが届いた。

「 たすけに きて 」

「 たすけて ここあ まっくら
かべばかり どあが あかないの 」

しばし無言で、モニタを見つめる。データをよく見ると宛先欄が空白になっている。

いたずらなんかじゃない。これは、届く人にしか届かないメール。ちらりと後ろを振り返る。

司の顔にはバンダナが乗せてあり、ぴくりともしない。まるで死体のような。

関わらない方がいい、関わればろくな事はない、怖いのも痛いのは嫌だ。

でも、もし、間に合うのなら、僕が助ける事ができるのなら。あの時みたいにか？

ぴろりん。触っていないパソコンからメールの到着音がする。次のメールだ。

「 はやく おねがい 」

「 はやくしないと しんじょう ころされちゃう
こわい おじさが もどってきちゃう 」

深呼吸をひとつして、覚悟を決める。ブラインドタッチで素早く返信を打ち込む。

「 たすけに いくよ 」

「メール とどいた いまから たすけに行く
だから きみの いる ばしょを おしえて
おちついて がめに てを あてて
いまいる ばしょの こと かんがえて」

送信ボタンをクリックして、両手でモニタに触れる。
ぶつん。意識を集中すると、画面が一瞬揺らぐ。
画面に引き込まれるような錯覚に、戸惑いつつも眼を閉じる。

「機械は電気で動く。生物もまた、脳からの電気で動く。
ならば、明確な意思で機械を動かせるはずだ。
強い意志があれば、機械を仲介して遠方との意思の疎通も可能な
はずだ。」

教授はそう言っていた。

意識をパソコンのハードデスクにリンクさせる。
膨大な量の『0』と『1』の連続を視覚に置き換える。
電話線に侵入し、メールの送信元を探す。子供の声が聞こえる、
遠くから、近くから。縦、横、高さ、角度、時間、ぶれる意識を
同調させていく。
かちり。チャンネルが合う。心の扉が開く。

暗い部屋、目の前には古いデスクトップの分厚いモニタ。

モニタに押し当てられた小さな両手。

溢れ出す景色、まわる、まわる、溢れ出す恐怖。

ぼくのうしろにいるのは、だれ？

バチリッ。

激しいスパークと両腕に走る電流の痛み、現実には引き戻される。情報はすべて揃った。外出用のコートを掴み、僕は駆け出した。

デスクトップには、竜胆の花。深い青いお墓に供える花。

根から切り離されて、いつまでも開かないつぼみ。花屋と墓地でしか見た事のない花。

地面に咲く竜胆をいつかこの眼で見たい。

11 銀色の影

いくつもの欠片が、ぼんやりと輪郭を描き、唐突に真実と遭遇する。

銀色の影

「銀髪か、、、。」

「なんか言いましたか？松村先輩。」

「なんでもない。」

隣のデスクで雑務の書類を淡々とこなしていく後輩の佐野に言葉を返して、考え事に戻る。

朝から降り続く雨のせいもあって、所轄への問い合わせや相談は少ない。

散らかったままのデスクの上に、使い古した手帳を広げて、最近起きた事件の事を振り返る。

1つはチンピラの恐喝事件、もう1つは桜並木での殺人事件。2つの事件は一応解決はしている。

チンピラすべてが何者かにより大怪我を負い病院送りになった。

殺人事件の方は容疑者が自殺している。しかし、その状況は不可解な点が多い。

そして、その両方に関わっている可能性の高い人物が存在する。

それが、『銀髪の女』

証言者の話を総合すると、ソイツは銀髪の短髪で、メガネを着用。年齢は10代後半。黒いコートで痩せ型。

そして、殺人事件の方ではバンダナを巻いた小学生らしき少年もいつしよに目撃されている。

事件直後、女は姿を消しており、当事者以外は目撃証言もない。

ただ、幾つか噂話を言う者はいた。「あれは、洋館の吸血鬼だ。」

と。

馬鹿らしい話だが、確かに少し離れたところに赤煉瓦の洋館がある。

しかし、見た感じ人が住んでいるようには思えず、暇な時にでも調べようと思いついて放置していた。

「佐野、ちよつと出掛けてくるわ。」

窓の外は土砂降りの雨。これでは、事件も起こらないだろうし、相談者も来ないだろう。

俺は、例の洋館を訪ねる事にした。

この雨の中、もし洋館に住んでいる人物がいるのであれば家にいる可能性は高い。

傘を差してレインコートを着ても、服が湿ってきて気持ちが悪い。「無駄足だろうに、こんなところで何やってんだろ、俺。」

歩く事45分、駅やバス停から遠く離れた高級住宅街の更に奥に立つ洋館の前まではたどり着いた。

しかし、道路から見えている所に玄関が見つからない。レンガ造りの高い塀の横をタラタラと歩く。

地図では確認してきたが、予想以上に敷地が広く感じる。

見渡す塀の先は、雨のせいで滲みよく見えない。

それでも、眼を凝らして前方を見つめると前からこちらへ走ってくる人が滲んで見えた。

バシャバシャと水たまりを物ともせず傘も差さずに走ってくる姿に、眼を見張る。

その姿が必死な形相で俺の横を走り抜けて行く。眼を擦って振り返る。

「マジかよ。」

遠ざかって行く銀髪の後ろ姿を、俺は急いで追いかけた。

何度も見失いそうになりながらも、銀髪に追いついたのはずいぶ

ん長い時間走った後。

雨のせいで増水している川沿いの寂れた酒屋の前で、立ち尽くしている。

まるで、店に入るのをためらうかのようだ。

少し距離をおいた電柱の影で、なんとか呼吸を整える。いつの間にか傘がなくなっていた。

そして銀髪は店の中に入って行く。

店の前面はガラス張りで、店内のカウンターには店長らしき中年の男がいる。

もう少し近くまで近づくと、銀髪は脇目もふらずにカウンターの前まで進む。

何か男と会話をしているようだが、内容までは聞こえない。

これで人違いだったり、例の人物だったとしても単に買物に來ただけだったら、馬鹿だな俺。

髪を伝う雫が眼に入って視界を遮る。その時、突然音が弾けた。

バリリッ、酒瓶が割れる鈍い音。慌てて店内へと駆け込む。

カウンター上の酒瓶が中程からまっぴたつに割れている。

見てはいけないような物を見てしまったような顔面蒼白の男。銀髪がこちらへと振り返る。

しかし、その顔は恐怖に耐えるかのように紫の唇を噛み、握りしめた両手はガタガタと震えている。

どちらが割ったのか？どちらが悪いのか？判断がつかないが尋常でない空気に圧倒される。

「警察だ！両方おとなしくしろ！」

思わず、そう叫んだ。銀髪は、何かに耐えるかのようにギョツと眼を瞑った。

男は、薄く笑みを浮かべた。なんだかわからないが間に合った。そう思ったのに。

男は後ろの棚から酒瓶を1本取り出し、銀髪の頭部目指して振り上げた。

12 葡萄酒色

床に広がる葡萄酒色^{ワイン}。キラキラと光るガラスの破片。ぶちまけられた不可解な現実。

葡萄酒色

激しいガラスの破壊音。飛び散るガラス、床にぶちまけられた血色のワイン。

振り上げられた酒瓶は、振り下ろす前に割れていた。

それだけじゃない。後ろの棚の酒瓶も、別の棚の酒瓶も、店内すべての酒瓶が割れていた。

「??? 痛えっ！ちきしょうっ！」

腕にガラスの破片が刺さったのに気づいた男が、握っていた酒瓶を放り腕を押さえる。

銀髪は男から下がるように、こちらへと2、3歩後ずさる。

啞然とした様子で視線が左へ右へと彷徨っている。

「、、、まずい、、、しまった、、、いや、、、そうじゃないい。」

「な、何があったんだ、一体。」

ふたりに近づこうと走りよる俺を避けるように、銀髪がすごい勢いで後ずさる。

そして一変してはつきりした口調で叫ぶ。

「マコト。マコトが、ここにいるんだ。」

だから、地下室に、鍵はカウンター裏に。早くしないと、早く！「違う！ソイツの言っている事はデタラメだ！」

中村真人なんて、オレは知れねえ！地下室になんて閉じ込めちゃ

いねえ！」

大慌てて否定する男を無視するように、銀髪はカウンター裏に廻り鍵の束を素早く掴む。

酷く慌てた様子で脇目も振らずに店の奥の下り階段へと走り出した。

「待ちやがれ！うわっ！ぎゃっ！」

酒まみれの床で滑った男が尻餅について、切り傷を増やした。俺は、男を置いて銀髪を追いかけた。

『中村真人』聞いた事ある名前だった。たしか数年前にこの川沿いで行方不明になった少年。

水難事故として処理されたが確か死体は発見されていない。

下り階段の向こう、薄暗い地下室には小さな裸電球がひとつぶら下がっている。

裸電球が申し訳程度に、ほんの少しだけ地下室を照らし出していた。

酒の貯蔵室らしく室温が低い。さほど広くない地下室の端に銀髪は立っていた。

銀髪の前には、簡素な机と椅子のセット。

机の上には、かなり旧型の分厚いモニタのついたパソコン。かなり埃が積もっている。

椅子には、焦げ茶色の物体が載っていた。

「マコト」

銀髪の言葉にハツとして、椅子にある物体をよく見てみる。

よく見ないと分からないくらい崩れていたが、子供の姿をしていた。

細く細くやせ細ったミイラが、崩れかけていた。

「、、、マコト、間に合わなかった。」

モニタの表面に、子供の両手の手形がはっきりとつけられていた。

まるで、今日つけられたかのように。

「何なんだ？ いったい。どうなっているんだ？」
そう尋ねながら銀髪の右肩に手をかけた。

「僕に触るな！！」

その直後で、俺の記憶は途切れている。右頬に残る酷い痛み。
薄れゆく意識の中で、場違いな、時刻的には正しいであろう言葉
が聞こえたような気がした。

「もう、夕飯の時間だ。早く家に帰らないと。」

13 境界線

「こんにちは、刑事さん。」鉄格子の向こうに、出迎えるように銀髪が立っていた。

境界線

「こんにちは、刑事さん。」

中村真人失踪事件解決イコール酒屋の店長逮捕から、一週間。

赤煉瓦の洋館を訪ねようとした俺の前、正確には屋敷の敷地内の門の向こうに銀髪が立っている。

まるで今日、この時間に、俺が来るのを知っていたかのように。

門から銀髪までの距離は3メートル。ライオンの檻の前に立つ子供のように。

手の届かない距離から緊張した面持ちで、こちらの様子を伺っている。

ベリーショートの前髪に、銀の前髪のメガネ。肌は雪のように白く、切れ長の瞳に色の薄い唇。

知的で美しい顔立ちと、壊れそうなほど細い体のライン。

黒のワイシャツに、ベージュ色のベストとスラックス。

ダークブラウンのストールが春風にはためく。まずは、深呼吸をひとつ。

銀髪は、警戒するようにこちらをじっと見つめる。

近くでよく見ると、可愛い、いや可愛いよりは綺麗な。

月を思わせる銀髪に、尖った神経質そうな表情。それは置いといて、

「刑事って、あんた、俺の事知ってるのか？」

「酒屋まで追いかけて来た人だろう。その、、殴ってしまったすまない。」

「いや、俺も後ろからいきなり声をかけて、悪かったな。」
実際あの後、顔は青く腫れ上がって大変だった。

殴られたにも関わらずこんなセリフを言ってしまうのは、あの時の銀髪があまりにも怯えていて。

なんだかこちらが悪い事をしたよな罰の悪い気持ちを抱えていたからだった。

「なあ、あんた。それより、どうやって中村真人の事を知ったんだ？
事件について教えてくれないか？」

俺は、単刀直入に質問をぶつける。早く聞かなければ、もう二度と聞けない。

銀髪とは出会えないような奇妙な錯覚に気持ち焦り出す。

銀髪は何かを確認するかのように、自身の両手の平を見つめる。
そして顔を上げて、少しでも自虐的な笑みを浮かべて、一言だけ
うすっぺらな言葉を風に乗せる。

「どうして？、だろうな。」

中村真人は水難事故で死んだのではなかった。

酒屋の男に誘拐された後に殺されて、ずっと地下室に2年以上も
放置されていたそうだ。

暗い地下室ですつと。小さく乾いた遺体は司法解剖の後、両親へ
と引き渡された。

両親の間には、真人の失踪後に男の子が生まれていた。

事故の記憶を振り払うかのように次の子育てに専念していた両親
は複雑な表情を浮かべていた。

真人を忘れようとした罪悪感、事故ではなく殺人であったという
シヨックと警察への怒り。

なぜ今頃になって不幸な出来事を掘り返さなければいけないの

かという理不尽さ。

両親は、最低限の遺体確認と焼却後、遺骨を持って帰って行った。当時の警察捜査への苦情も言わずに。両親にとって事件は2年前に終わっていた。

今は、今の子供の事が大切なのだ。

突然の事件解決、不可解な酒瓶の現象の数々、俺も少しだけ笑い返す。

一種間前に殴られた頬が、少しだけ痛んだ。

「わからないのか？ひとまず、話を聞かせてくれないか。」

「嫌だ。」

銀髪は眉をしかめて、苦虫を噛み潰したような顔できっぱりと言いつつ放った。

「あなたは、この屋敷を知った上で言っているんですか？」

「ああ。吸血鬼の館とか、呪いの洋館とか、近づくと死を招く屋敷とか、物騒な噂ばかりで大変だな。」

事前に調べたが、この屋敷内や屋敷の周りでは昔から数多くの事件や事故が発生している。

呪いだとか祟りだとか言われているが、きちんと調べれば事件は犯人がきちんと存在している。

事故も原因は判明している。

「噂なんかじゃない。」

銀髪はそう言って、こちらの視線を避けるように、足元に咲く薄紫の花へと視線を落とす。

半ば伏せられた臉の睫に眼が離せなくなる。

「だからこの屋敷には、もう二度と近づかないで下さい。お願いします。」

そして、銀髪は踵を返して奥に見える屋敷へと走り去る。

「おい！ちよつと待てよ！」

けして振り返らない。けして立ち止まらない。後ろ姿が屋敷に消える頃、俺の携帯電話が鳴る。

署からの呼び出し、事件発生だ。現場へと向かわなければならぬい。

コンサートホールで2件の不審死だそうだ。屋敷はまた今度にするしかない。

見上げた空はどこまでも青く澄み渡り、千切れ雲が遠く、早いスピードで流れていく。

久しぶりに俺の上にも空がある事を思い出した。

14 呪い

残酷な子供のように、健気に咲いた躑躅の花をむしる。甘い蜜を奪っては踏みつける。

呪い

「こんにちは。お邪魔するよ。」

「ああ、あんたか、いらつしやい。」

後ろ手でドアを閉めると、薄暗い店内に細やかな埃が舞い踊る。

店奥の蔵つい親父が面倒くさそうに、こちらをチラリと見て、視線をテレビの競馬中継へと戻す。

「前仕入れてったばっかりじゃねえか。返品なら受け付けねえぜ。」

「いやいや、また、仕入れだよ。いいカモが見つかってさあ。」

片っ端から買いまくってくれて、しかも、もっと珍しい商品はなにかってな。

だから、今回はちよつと風変わりな感じの物が欲しい。」

「毎回ながら、たいしたもんだな、エセ骨董品商様は。」

「いえいえ、店長様こそ。」

時代劇の悪役にありがちなセリフを真似ながらも、品物の品定めを始める。

たいした価値のないガラクタを、リサイクルショップで買っては骨董品として高値で売りさばく。

スリリングで楽しく儲かる悪徳商法。小金持ちの親父なんかちよるいもんだ。

ポイントは大金持ちには手を出さない事。

大金持ちには、目利きがついてやがるし、バレた場合に面倒だからな。

奇妙に歪んだ顔の象の置物、薄汚れた紙に描かれた意味の分からない抽象画。

変わった色や形の天然石など、骨董品っぽく見える怪しい品物を選んでいく。

実際の価値は関係ない、それっぽく見えて、それっぽい作り話ができそうなやつが良い。

「なあ、これはなんだい？」

古くさい戸棚の下に、小さいダンボール箱が押しやってある。

この店長は、ポリシーがなんやらと言って商品はすべて中身が見えるように置いている。

そんな中で無地のダンボール箱は目立つ。

入荷したてでもなさそうだし、箱がやたら綺麗なのがまた気になる。

「お、やたら重いな。」

見かけは小さいのにずっしりと重い。店長が渋い顔で一枚のポラロイド写真をこちらへと見せる。

「中身はこれだよ。」

写真には、赤いルビーのような宝石がいくつか写っていた。

サイズを比べるために横に置かれたタバコの箱と比べるとかなり大きな部類だ。

「なんだよ？これ。」

「呪いの石だそうさ。欲しかったらやるよ。」

一見宝石に見えるのに無料タダで？高く売れそうなのに訳ありか？

「へえ、どういいうワク付きで？」

「とある金持ちがこれを手に入れてから、一族が死に絶えたらしい。廃墟になった後も、興味本位の若者が肝試しに見に行ったやつらが行方知れずだそうさ。」

「だったら、これ、なんでここにあるんだよ？」

「肝試しで度胸を見せようと持ち出したそうさ。

それでそいつが直後にバイクで事故って死んだんで、遺品処分で流れてきたんだ。」

「で、呪いのほどは？」

「今の所何もねえよ。」

「なら、これも貰って行く。今度のカモは気に入らそうさ。」

呪いなんてよく調べれば単なるデマばかり、小心者の思い込みなんだよ。

でも、こういった商品は高く売れるから大好きだ。

「じゃあ、またな。」

男がドアを出て、また埃が舞い上がる。蝶番が奇妙な音をさせる。

「、、、ただ、あの石を手に入れてから、嫌な夢を見るんだ。

妙な餓鬼に絞め殺される夢を毎晩。毎晩。正直割りに合わねえ。」
客のいなくなった店内で、ため息まじりに店長が呟く。

料金交渉を終えて、品を車へと積み込む。車の隣を宅配便のトラックが通りすぎていく。

そのトラックが目の前の坂の途中で止まり、運転手がトラックを離れる。

ダンボールを抱えたまま、なんとなくトラックを見やる。

何だかトラックが少しずつ大きくなっていくような気がする。

違う。トラックが少しずつ坂を降りて来ている。

「おいっ！サイドブレーキかかってねえぞ！」

見る間にトラックはスピードを上げこちらへと進む。

鼻先スレスレをトラックが通り過ぎた。その先はさっきのリサイクルショップだ。

激しい衝突音が続いて聞こえた。あれでは店長は助からないだろ

う。
もう少し店内に居たら、もう少し道の手前に立っていたらと思うとゾクゾクする。

「呪い、、、なのか?、、、まあ、自分も品も無事だからいいか。」

関係ない。自分はいつだってラッキーだから関係ない。落ち着け、落ち着け。

そんな風に心に言い聞かせながら、車のトランクを閉める。店の方から何か小さな音がする。

スプレーを噴いたようなシューツという音。119番した方がいいか?それとも110番か?

いやこのまますぐにトングズラするべきか。第一発見者って良くねえだろ。

落ち着け、落ち着いて考えろ、自分。

気持ちを落ち着かせるためにポケットからタバコを取り出す。

安っぽい100円ライターで火をつける。何かの匂いがする。これは何の匂いだったか。

その答えが出た時はもう手遅れだった。

これは都市ガスの匂い。

一瞬のうちにすべてが炎に包まれる。燃える、手が足が顔がすべてが。

熱い、いや、痛い痛い、視界が見る間に曇って暗闇の中でのたうつ。

眼球が焼けて白濁したんだろう。苦しい、苦しい、苦しい。

炎が肌を焼く匂いの中で、のたうち続ける。なんですぐに死なな

いんだ。早く楽にしてくれ。

火が消えたのか全身の痛みが少し和らぐ。

自分の心臓の音が聞こえ、鼓動が聞こえるたびに体に激痛が走る。誰かが耳元で叫ぶ。

「すぐ救急車を呼ぶから。死ぬな、がんばれ！」

やめる、やめてくれ。こんなに痛いのは嫌だ。もう殺してくれ。

ちくしょう、声が出ない。体が動かない。これじゃ死ぬ事でもきやしねえ。

ひいてはかえす波のように繰り返し続く痛みの中で、少しだけ意識がはつきりとしてくる。

ああ、本当の呪いってヤツは、すぐに殺してもくれねえのかもしれねえな。

「そのとおりだよ。」

すぐ耳元で、さっきとは違う、生意気そうな子供の言葉と笑い声が聞こえたような気がした。

燃え上がる店舗のそばに躑躅の花が咲く。強いピンクではなくくすんだ赤色の花が咲き誇る。

これは蓮花躑躅。この花をむしる子供達はいない。蓮花躑躅にだけは毒がある。

間違えてこの花に手を出した者は、自ら散らした花びらの上でもだえ苦しみ地団駄を踏む。

一歩進んでは、また一歩戻る。ダンスのステップを踏むように。

炎

「司、どこへ行くんだ？」

「、、、。」

司が窓枠に足をかけたまま、渋い顔でこちらを振り返る。片手に靴を抱えて。

午前中の早い時間。いつもなら司はまだ寝ているはずの時間。

「この時間って掃除中じゃないの？」

「、、、雑巾を忘れたから取りに来た。」

「ただの散歩だよ。すぐに帰る。」

「ダメだ。散歩な訳ないだろ。」

「行かないと間に合わないんだ。すぐ戻るから！」

慌てるように司が窓から外へ飛び出す。

「おい！危ない！」

小さな着地音がして、下を覗くと走り去る姿が遠ざかっていく。

せめて、せめてドアから出て行ってくれ。ここは3階だ。

帽子を被って、財布を持って、地図と、、、教授の携帯電話を持つて。

もう外には出ないと何度も誓うのに、僕はまた外へと走り出す。

何度か人通りの多い道を避けて追跡する。姿は見えなくても近ければ方向くらいはわかる。

なんだか焦げ臭い匂いとガスのような匂いが漂ってくる。これは、、、。

黒い煙、そして建物から吹き出す炎。消防車とパトカーの音が聞こえる。

警察官が現場へ続く道路の前で野次馬を追い払っている。

火事だ。自分の血の気が引いていくのがわかる。冷や汗がじわりと手のひらを濡らす。

関係無い、あれは僕とは関係無い、わかっている、頭ではわかっているのに。

鼓動が早鐘のように鳴り、視界が揺らめく。頭が割れそうに痛い。消せない過去がフラッシュバックする。揺らめく炎。豊が燃える、全てが燃え上がる。

念願の警察官になれて、はじめての現場警備。

現場の火事がガス栓の破損でまだ勢い良く燃えているらしくドキドキする。

火事の野次馬はわがままで、気後れして押されそうになる。

それを見越したのか先輩が来て手伝ってくれて、少しホツとする。そんな矢先、先輩に言われた。

「おい、佐野。あそこのヤツ、声かけて来い。」

「は、はい。先輩。」

野次馬よりかなり離れた後ろの方で、誰かがしゃがみ込んでいる。火事を見て具合が悪くなったのか？人ごみをかき分けて、その人の元へと向かう。

「あの、君？大丈夫、ですか？」

高校生くらいか、遠くからは帽子でわからなかったけど、髪が銀髪だ。

キツく瞳を閉じて、両手で耳を塞ぐようにして、歯を噛み締めて

いる。

明らかに顔色が悪い。

「、、、嫌だ。来るな。」

呟くような、独り言のような小さな声で。ミシミシとどこからか妙な音が聞こえる。

「大丈夫ですか？」

少し大きい声で言っつて、肩を揺すろうと手をかけた。

銀髪の子の体がビクリと震え、すごい勢いで手のはね除けられた。

「触るな！さわるなさわるなくなるな！」

「あの、ど、どうかしたんですか？」

もう一度手を伸ばす。

「違う！嫌だ！母さん！」

銀髪の子が半狂乱で叫んだ瞬間に、ドオオオオオンツ！という爆音と共に激しい熱風が吹き荒れた。

な？何だ一体？瞬時の判断で顔を庇った腕をどけて見渡す。

「！！」

自分の居る場所を中心に左右の雑居ビルが窓から激しく火を噴いて燃えていた。

火事の現場からはここはだいぶ離れているのになぜ？一体何があったんだ？

銀髪の子は周囲の爆発に気がつかないのか、虚ろな目で何かブツブツと呟いている。

「佐野！その子を持って早くこっちへ来い！」

先輩の呼び声で我に返った。そうだ、早く安全な場所に逃げないと。

先輩のいる辺りでは野次馬が騒ぎながら携帯電話でこちらの写真を撮っている。

「君！一緒に逃げよう！」

再び肩に触れようとした時、銀髪の子と目が合った。

「触るな。」

うつてかわって低い声ではっきりと拒否された。ゾクリと鳥肌が立つ。

「でも、ここは、、、」

「失せろ。」

「え？」

ボツと袖口の辺りでくぐもったような音が聞こえた。

そして、銀髪の子を触ろうとした右手の袖口が燃え上がった。

「燃えろ、燃えてしまえ。」

銀髪の子がこちらを見て笑う。壊れた笑顔で美しく微笑む。

「全部、燃えちゃえばいいんだ。全部！全部っ！」

袖口の火がだんだんと体の方へと広がっていく。

なんなんだ？どうなっているんだ？わからない？でも不思議と熱くない。

先輩が何か叫んでいる声が聞こえる。このまま、焼けて死んでしまふのだろうか？

それにしても、笑顔が綺麗だなんて思う自分は夢でも見ているのだろうか？

「要！やめろ！要！」

司の声が聞こえる。司？どの司の？

「要！しっかりしろ！これ以上燃やすな！」

燃やす？何を？何で？ここはどこだっけ？意識が少しずつ戻ってくる。

「司？」

「ああ、もう大丈夫だから、落ち着いて。」

ゆっくりと司が僕の背中に腕を回し、抱きしめてくる。

司の体温を感じる。子供って体温高いからなあ。

そうだ。火事を見たんだ。視界の向こうで野次馬が何か言ってる。その向こうに鎮火されつつある火事の現場が見える。

ぼんやりと周囲を眺める。道路の左右のビルの窓ガラスがすべて割れていた。

地面を見ると僕を中心にアスファルトに亀裂が走っている。

亀裂を辿る視界の隅に、人の腕が見えた。

袖口は焼け落ちて皮膚は炭化して黒くなっている。

「、、、。」

また、やってしまったか？また、殺してしまったか？

「要、大丈夫。死ぬほどじゃない。この人は平気。落ち着いて。」

しゃがみ込んだ状態の僕の髪を司が優しく撫でる。

「大丈夫、大丈夫。」

小さい子供をあやすように。警戒する猫を撫でるように。

飲んではいけない蓮花躑躅の蜜に手を伸ばすように。

ダメだとわかつているのに近づいては、躊躇して後ずさる。

「躑躅」は足を止める、「躑躅」は足で踏む。

中国で毒性のある躑躅を羊が誤って食べて、足踏みをして苦しんだということが躑躅の名前の由来らしい。

諦める事ができない。手にする事もできない。

僕は駄々っ子のようにいつまでも無様にもがき続ける。

15・5 記憶

ずいぶん前の事のような、昨日の事のような記憶。

記憶

僕がまだ小さかった頃。母さんが、弟が、まだ、いた頃。

あの日は特に何か違った訳でもない普通の一日で、ご飯を作って食べて片つけて洗濯をして。

いつものように、母さんはちょっとした言いがかりをつけては、僕を叩く。殴られる蹴られるも習慣と化していて、別に対して痛みは感じなかった。痛いのは心の方で。ひと通り母さんの気が済めばそれは終わる、少しの間だけ我慢していれば、ただの日常に戻るんだろうと思っていた。

どんな事をされても、僕は母さんの側に居たかった。母さんが好きだった。そして、弟が痛くないように、全部僕が受け止めてしまえば、誰も困らないで何も壊れないで済むんだと。体を丸めて、膝を抱える。お腹を守る事。顔を伏せて顔を守る事。何も見ないで済むよう目を瞑る事。舌を噛まないように歯を食いしぼる事。耳が塞げないのが問題で、できるだけ母さんの声が耳を気にしないよう別の事を考える。

あの日は打ち所が悪かったようで、気がつくとも畳みに倒れていた。頭がぼうつとして、視界がなんだか見えにくい。目元を手で拭おうとして、腕が不自然に背中側に回されていて動かせない。何度か動かそうとしてから、やっと腕が何かで縛られているみたいな事が理解できた。無理矢理に首をよじって確認するとタオルか何かのような物で縛ってあるようだった。倒れた状態のまま畳を眺めていた

ら、だんだんと畳が黒くなっていくような気がする。体を起こそうとして、後ろ手のまま上半身を持ち上げかけた所でバランスが崩れた。ぐらりと世界が傾いて、体が畳へ叩き付けられる。体を打った弾みで本来の痛みが戻ってくる。痛いのは頭だ。切れているのか面白いほど早いスピードで畳みにシミが広がっていく。視界の外側が薄暗くなってきた、暗くてかなわない。

キシッ キシッ と 僕の周りを母さんが畳を踏む音が聞こえる。コポコポとタンクか何かから液体を流すような音が、、、ストーブの灯油？鼻につく揮発性の匂いがする。

マツチを擦る音がして、視界の中程、母さんの手に青い炎が見えた。それが、ぼとりと畳に落ちる。畳を舐めるように炎が広がる。パチリッと何かが弾けるような音と焦げ臭い匂い。畳が燃え始めた。僕は燃やされてしまうのか？まあ、いいか。

そのうち母さんと弟の声が聞こえてきた。

「やめてよ！かあさん！かなめがしんじやうよ！」

「こつちに来なさい！あなたは行っちゃダメ！」

言い争う声に混じって、ドタバタと足音がする。足音が耳に響く。なんとか、顔だけを動かして目を瞬く。

「こつちに来なさい！」

「やだ！」

「来なさい！」

「やだ！」

炎の先に弟の小さな背中が見えた。その向こうに母さんが見えた。母さんの手には血塗れの包丁が握られていた。

ああ、そうか。包丁が刺さったから、こんなに血が出ているんだ。僕は起き上がろうとしてみただけ、体が石のようで動かなかった。

声を出そうとして口を動かしたけれど、声が出なかった。僕はもう、どうでもいいのに。このまま死ぬのならそれでもいいのに。だからふたりは仲良くして欲しい。

母さんが包丁を振り上げるのが見えて、とっさに叫ぼうとした。叫べるはずもなく、ただ、少しだけ体がびくりと動いた。

母さんと目が合った。その目に浮かぶのは恐怖。いつもと同じ恐怖。僕は母さんの味方なのに。母さんは僕の力が怖くてそんな目で僕を見るんだ。その隙に弟が母さんに掴みかかり、包丁が畳へと落ちて刃先が畳に突き刺さった。弟がそれを急いで拾い上げた。

炎が視界を揺らめかす。でもさつきより明るくなって、ふたりが良く見える。

「くるな！くんなよ！」

「ちよつと！それを返しなさい！」

「くんたつていつてんだろ！ちかづくときさすぞ！」

「あなたは、そんなことできないくせに！いいかげんにしなさい！」

「やだ！やだやだ！かあさんなんてきらいだ！だいつきらいだ！しんじゃえ！しんじゃえばいんだ！」

「なんで？なんで？そんなこと言うのよ。あなたは要と違って大丈夫なのよ。お願いだから良い子でいて」

母さんの声が戸惑いに変わる。そう、弟は大丈夫なのだから。僕の事はどうでもいいから。無理矢理に軋む体を動かして、起き上がれないか努力する。足が後ろの壁に当たった。一度壁まで這いずつてから壁に寄りかかるように少しずつ体を起こしていく。砂壁の細かい粒が顔に食い込む。なんとか上半身を起こす事ができた。狭い部屋の中心に、たき火でも焚いたように炎が立ち上がり、僕とふたりを分かつ。だんだんと火が勢いを増していく。部屋の出口は向こうにしかない。もう、炎の向こうには渡れそうもない。

「、、、かあさん。」

弟がぼつりと言つて、母さんへとゆっくりと近づく。僕からは後ろ姿しか見えないので表情は見えない。

「そうよ、落ち着いて。大丈夫よ。」

母さんが、弟を抱きしめる。そして、その直後に鈍いうめき声が聞こえた。

「どうして？何で？」

2、3歩後ずさつた母さんの脇腹に包丁が刺さっていた。

「くくくっ」

弟が乾いた笑い声をあげる。

「だって、かあさんがいなくなればいいんじゃない。」

かなめをいじめるかあさんなんていらぬ。かなめだけいれればいい。

弟の笑い声がする。母さんがよろめいてうずくまる。弟が引き抜いた傷から止めどなく血液が流れ出す。

「、、、か、さ、、、め」

声がうまく出ない。口の中が乾いて舌が口内に張り付く。弟がこちらへと振り返る。返り血の撥ねた白いTシャツに満面の笑みで。

「もう、だいじょうぶだよ。ぼくがかあさんをやっつけるからね。」

弟の目には迷いが無い。僕はそんな事してほしくないのに。必死で首を左右へと振る。

「、、、がう。そ、、、して、、、じゃ、な、、、い。」

弟が少しだけ、悲しそうな表情を浮かべた後、すぐに笑顔に戻る。煙で息が苦しい。目が痛くて涙がこぼれる。

「そんなのうそだよ。かなめだって、ずっとこうしたかつたんだよ。ぼくがぜんぶやってあげるから。」

弟が母さんへと向き直り、血塗れの包丁を握り直す。その後は何

かが何かに刺さるような鈍い音が何度も何度も。母さんの悲鳴にもならない声と弟の途切れない笑い声。

違う違う違う違うんだ。嫌だ。こんなの嫌だ。母さんが母さんが。それなのに体が動かない。動かせない。視界が赤く赤く染まっっていく。なのに目が離せない。目を瞑る事ができない。奥歯が力チカチと鳴り、足がガクガクと震える。涙が押さえられない。胃の辺りがギリギリして口に酸っぱい味が滲んでくる。母さんが刻まれていく。もう嫌だ、やめてくれ。

唐突に母さんと目があった。

見開いた瞳で、血塗れの腕がこちらへと伸びる。唇が僕の名前を呼ぶ形に動いて、ごぶつと嫌な音がして唇からも血が溢れた。

「しぶといよ。はやくしんじやえよ。」

弟が、母さんの腕を左手で掴んで、右手の包丁を容赦なく突き刺した。母さんの顔へと。嫌な音がする。肉が裂ける音が。母さんの悲鳴が。足元にまで、炎が打ち寄せる。その熱気に足がひりひりする。母さんの、弟の足元にも炎が広がって部屋が赤い。暑い。苦しい。燃える、燃える、何もかもが燃える。世界が燃え尽きる。そこまですで意識が途切れた。

あの日の事は、いまでも鮮明に覚えている。あんなに苦しかったのに、今は心が錆び付いたようにこびりついた悲しみがあるだけで、なんともないなんて。何度も考える。あの時どうすれば良かったのか？僕は何をしたかったのか？僕は母さんに死んで欲しかったのか？

弟を斬り殺した血糊が付いた事が名前の由来の弟切草^{おとぎりくさ}。傷を治す薬の事を他言してしまった弟が悪いのか。弟を問答無用で切り捨て

た兄が悪いのか。役に立つ薬ならば、多くの人に教えて何が悪いのか。忌々しい名前と呼ばれるようになった草が人の傷を癒す。別名血止め草。忌々しい記憶でも、僕は捨てる事はできない。忌々しい気持ちもまた偽る事はできない。

16 尋問

アスファルトに咲くタンポポのように。深く深く根を下ろして消えない記憶。

尋問

「すみません。ちょっと混乱してて、よく覚えていないというか、」

「。」「
銀髪の子が居心地悪そうにソファに腰掛けて、しかししっかりと口調で答える。」

佐野の服が燃え上がったのと、周囲のビル爆発があったため任意同行で署に連れてきたが、学校はサボリか？

一応佐野の一番近くに居たので、この子が犯人の可能性も考えなければならぬ。

「一応記録に残すから、ええと、名前はなんていうんだっけ？」

「さか、、、いや、篠塚、、、要です。」

「篠塚要。女性。年は？」

「、、、。」

篠塚要の動きが突然ピタリと止まる。

「何か間違えたかな？」

「、、、あの、僕は男です。それから年は20才はたちです。」

「うん。そういうバレバレな嘘はつかなくていいから。」

胸はあるかないかわからないくらいだけど、この顔、この体つきで男はないだろ。

声だつて低くない。年は高校生くらいか？ともかく、

「親御さんに連絡するから、自宅の電話番号を教えてくださいませんか？」

「、、、両親はずいぶん前に亡くしました。自宅は、固定電話は引

いてないんですが。」

「おいおい大人をからかつちやいかん。正直に答えないと家に帰してあげられないぞ。どこの学校の生徒だい？」

「、、、20才はたちですから。しかも、学校には行っていません。」

「君ねえ、真面目に答えてくれないと面倒な事になるよ。」

「、、、そちらこそ、真面目に話を聞いてください。」

身元の確認が必要であれば、保険証を自宅から持って来ますが、のれんに腕押しはたきの問答にだんだんと腹が立つてくる。佐野は俺の目の前で燃え上がったというのに。

こいつらときたら、自分のちっぽけな保身ばかり。

「佐野は、いや、警官がひとり大火傷をしたんだ！ふざけるな！」
口で言ってもわからないのか！銀髪の子の襟口へと手を伸ばす。

「！！」

途端に凄い勢いで上半身を反らして、ソファの背へと避けられる。触らないで、ください！ぼ、僕は他人に触られるのがト、トラウマで、、、。」

見る間に顔色が変わり、声が振るえだす。そうだ、佐野と話している時もそうだった。

「おい！あの時何があったんだ！佐野はなんで燃え上がったんだ！ちゃんと答える！お前がやったのか！そうなのか？」

「青木さん！ちょっとタンマ！！！」

「なっ！」

突然目の前に立ち塞がれ、後ろへと押し戻された。

「落ち着いてください。」

「松村！？」

同僚の松村が、シワだらけのワイシャツで立っていた。

「取り調べじゃないんだから。ほら、離れて、離れて。怖がらせちゃダメですよ。」

「しかし、こいつはっ!」

「シロですよ。目撃者が複数いる上、路上の監視カメラ映像も残っていますし。」

「、、、うつむ。そうか。」

「佐野は命には問題ないそうです。意識も戻ったんで大丈夫ですよ。少しコーヒーでも飲んで落ち着いた方がいいんじゃないですか? 後は俺が話聞いときますんで。」

「そうだな。後は任せる。」

部屋を出ようとした所で、ふと気がついて振り返る。

「なあ、松村。、、、そいつ本当に男なのか?」

「え!? 女の子でしょ?」

松村が、俺にだけ聞こえるような小さな声で問いを問いで返す。

「男、、、なんですか?」

「大丈夫かい?」

なんとか触られずにすんだので、ソファで一息ついていると前に家に来た刑事が話しかけてきた。

「ええ、なんとか。、、、その、ありがとう、、、ございます。」

ここは、逃げる場所がない。さっきのような事態になればただではすまない。そう思うと未だ声が震える。

事情聴取なんて来なければ良かったか。司を連れて来なかったのが良かったのか、悪かったのか。

刑事が意外そうな顔でこちらを見ている。

「、、、どういたしまして。ここで、あの時みたいに殴ったら話がこじれるだろ?」

「、、、。」

左右を見渡し周囲に人がいないのを確認して、近づきすぎない程度の距離で小声で話しかけてくる。

「なあ、ところでココだけの話、今日の事件^{アレ}、アンタがやったのか？」

「、、、。」

「口外しないからさ。俺は今まではそんなの信じないタチだったんだが、アンタのは別格だ。」

「、、、。」

「悪気があってやってるんじゃないんだろ？協力するからさ。」

「、、、。」

警察では迂闊に話してはいけない。病院に送られて薬を盛られるから。

親切な人には近づいてはいけない。僕に関わればろくな事はない。

親切ではない人にも近づいてはいけない。何をされるかわからないから。

体に染み付いた記憶。体に刻み込ませたルール。

タンポポの花のように、気の狂いそうな黄色から綿毛になって自由^ニに空を飛んでいければ良いのに。

ふと、視界の端に揺れる人影に目が止まる。他にもいくつか見えるがこれは。

調書用らしき紙を裏返して、一緒に置かれたボールペンを走らせる。

「おい？何書いてんだ？」

「刑事さん。この人知ってます？」

「!?!?!」

年頃の女性の似顔絵。悲しそうな瞳。

そこに残るのは恨みではなく家族の元へ帰りたいたいという気持ちだけ。

殺されてなお、なぜそんなに澄んだ気持ちで居られるのか。犯人が憎くはないのだろうか。

刑事の肩の上辺りに漂う半透明の姿。事件現場から連れてきたのだろう。

「この子の事、知っているのか!!」

刑事さんの言葉を無視して、地図と風景を描いて最後に×印を書き込む。

「これ、差し上げます。」

数日後、彼女の遺体が地図の場所から発見されるだろう。

警察は嫌いだ。関わるべきではない。でも、迷える魂は家族の元に帰るべきだ。

家族を愛し、愛してくれた家族が居るのならば。

17 変化

何かが変わり動き始めた。いつまでもひなげし雛嬰粟のように無邪気では居られない。

変化

警察署を出て、ひとつ目の角を曲がった所に司が立っていた。

ブロック塀の影の中、どこから持ってきたのか血のように赤い石を2つ左手で弄んでいる。

カチンカチンという小さな音と、伏し目がちに石を見つめる物有家な表情。

近くまで行っても僕の実在に気がついていないようだ。珍しい。

「司?」

控えめに声をかける。何も反応しない。聞こえていないのか。

「司?」

もう一度、少し大きな声で話しかける。

司がぼんやりとこちらを見た後、2、3瞬きをしてこちらをきちんと認識する。

「要」

何か困ったような顔をして、僕の名を呼ぶ。

「司、すまない。僕のせいでやっかいな事になってしまった。」

「いや、その、勝手に出掛けたのは、、、、、、、。」

そこまで言っ、言葉に詰まってしまっ。

「、、、、ごめん。」

司はそれだけ言っ、鎖を握りしめる。前にも何回か同じように言葉に詰まった事がある。

それは、自分を表現する一人称を使おうとする時。

司が言いたいのは「僕」「俺」「私」「自分」、一体なんなのか？
まるで自分のイメージがしっくりくる物が、わからないような迷い。

なぜ、そんなにこだわっているのか？その言葉にどれだけの意味があるのか？

「司、帰ろう。」

「うん。」

どうでもいい。今はただ家に帰る事だけを考えよう。

誰かの家の花壇に、雛罌粟の花が咲く。オレンジ色の花で、茎がひよろりと長い。

風を受けては不安定に左右へと激しく揺れる。

「ポピー。これってポピーだろ？」

司が、唐突に言う。そう、確かに。

「そう、ポピー。日本の和名で雛罌粟ひなげしとも呼ばれる。」

「ヒナゲシ？そういえばケシの一種か。」

司は、基本的に花や植物には無頓着だ。何度か話したが一般的な花の名前さえも知らないのに。

「ポピーに何か思い入れでもあるのか？」

「昔、ある人が言ってたんだ。ポピー。花言葉は出来損ない。綺麗なのにな。」

昔とはいつの事だろう。懐かしむような口調になんとか少し何か
が引っかかる。

「ポピーにはもうひとつ別名があるんだ。虞美人草。

虞美人と言う美しい女性が敵軍の捕虜になるぐらいならと自害して、その墓から生えたと言われている。中国の話だ。

名前も意味も、時や場所、見方を変えれば、すべてが違う。でも花自体は同じだ。

なんと呼ばれようと、どう思われようと関係無い。花は変わらない

い。

そして僕らの花に対する気持ちも変わらない。そうだろ？」

花から目を離して、司の方を見ようとして気づく。司が少し後ろで立ち止まっていた。

啞然としたような、ハツとしたような少しだけ目を見開いた表情で僕を食い入るように見つめる。

「どうした？」

「なんでもない！」

早足で司が僕を追い抜いていく。

「司！おいっその道を左。まっすぐ行くと行き止まりだ！」

司を追いかけて僕も走り出す。

花が好きだ。花は差別しない。花は世話しただけ育ちが良くなる。

花は別の物にはなりやしない。

そして勝手にいなくなっではしまわないから。

白。塗りつぶす偽りの色。その下にあるどす黒い本性を隠す醜い色。

鏡

「ちょっと、カーテン閉めて来るから。」
「ん。」

食事中に、断ってから席を立つ。普段使う部屋のカーテンを閉めにいく。もうすぐ雨が降るのが予知できた（みえた）から。雨が降る前に窓を閉めなくては。空には灰色の雲が敷き詰められて、気持ちを不安にさせる。

「要？雨、嫌い？」

「いや、雨は嫌いじゃない。」

僕は、いつも雨が降る前にカーテンを閉めるから、疑問に思うのは当然だろう。

「雨は好きだよ。見るのもあの音を聞くのも。」

単調で静かに続くあの音は聞いていると気持ち落ち着く。万物に降り注ぐ水滴の群れも、綺麗だ。

「そっか。」

司はそれ以上は聞いてこない。

カーテンを閉める前に、庭を眺める。半化粧はんげしきようの花が咲いている。

花の元の葉が半分ほど白く染まる。うわっ面だけのかりそめの白。葉の裏も、葉全体も白くする事はできない。中途半端な白。

母さんは、白が好きだった。母さんの服は白が多かったし、僕らの服も白ばかりだった。白い服を着た母さんは綺麗だった。だから

僕も白が好きだった。あの日までは。

「あの子の髪、すごい完全にまっしろね。」

「相当シヨックだったのね。」

「まだ、小さいのに可哀想。」

看護婦さん達がこそこそ話しながら通る。子供で白髪は目立ちすぎる。

僕の髪の色。母さんも父さんも日本人だ。だから、髪は普通に黒色だ。僕もあの日までは普通に黒髪だった。あの日を境に僕の髪は全て白くなってしまった。

「科学的な理論ではあり得ないはずだ。髪の毛の細胞は爪と同じで根元以外は死んでいるから、生えている髪が自然の状態で白く変わるはずない。」

「そう言われても変わってしまった物はしょうがないでしょう。」
医者達が診察室の向こうでもめる声が聞こえる。

それについて教授は、強い電波や高周波みたいな物が一時的に髪に流れたんじゃないかと言っていた。髪を黒く見せるのは細胞内のメラニンだから、それを破壊できれば、細胞は黒くなくなる。レーザー治療でほくろやシミのメラニンが壊せるのだから、不可能ではないと。

「気分はどう？ご飯は食べれている？」

「、、、。」

「ご飯は食べなきゃだめだよ。元気になれないからね。」

先生は嫌いじゃない。でも、先生にとって僕はただの患者のひとつでしかない。患者にはみんな優しく、患者ではなくなればどうでもいいんだ。

雨が降る日はいつも窓を眺めていた。窓の外じゃなくて、窓に映る自分を。僕はなぜココにいるのか。なんでもう母さんも弟もいな

いのか。僕はどうすればいいのか。周囲の陰口はどうでも良かった。
「ねえ要君。髪、黒く染めようか？」

後ろに先生が立っていた。珍しく気まずげに視線を合わさずに、
カルテの束をいじりながら。

「染めない。」

「振り返らずに即答する。」

「、、、そう。」

雨の降る音だけが、静かに響く。時折風が雨の音を変える。

「聞いても、いいかな？、、、その髪、嫌じゃないの？」

「嫌だよ。」

白は嫌いだ。また、あの時のように赤く染まってしまっような気がして。

「じゃあ、なんでいつも見ているの？」

「これは、、、たぶん、シルシだから。」

「印？」

「母さんと司がいたシルシ。忘れちゃいけないんだ。」

それ以来、僕の髪はずっと白髪のまま。ソレには耐えられた。むしろ、ソレはあってしかるべきだと。だから、その頃は意識的に鏡を見ていた。水鏡も、雨の日の窓も。僕の髪は何度も赤く染まった。髪が赤く染まるたび、だんだん擦れていく、慣れていく自分がいた。どうせ僕の世界には、母さんも弟もいない。ならば、髪を汚すのが僕や他の誰かの赤であるのなら、構わない。

その白が、僕の断罪が単なる偽善だという事に気がついたのは、身長が伸びてけして忘れられない拭えない事実。

その顔、眉毛、瞳、鼻、唇、睫毛の先まで、、、僕は、僕の姿形は、段々と母さんに似ていく。

元々女の子に間違えられる位だったけれど、僕は確かに僕でしかなかった。それなのに、鏡の中の僕は、日に日に母さんに似ていく。そこに映る姿が僕に向けられた瞳が、苦しい。狂おしい。向き合う事が出来ない。鏡の中の母さんが言うんだ。

「要、どうしてあの時母さんを助けてくれなかったの？」

「、、、怪我をしていて、、、体が動かなかったから、、、。」

「嘘をつかないで要。体なんて動かさなくても、あなたなら司を止められたはず。」

「!!!」

「司は普通の子だったから。あなたならいくらでも殺せただはず。」

「、、、。」

「要は、母さんより司が大切なのね。あなたも母さんに死んで欲しかったのね。」

「違う!」

「要、要、要、カナメカナメカナメカナメカナメカナメカナメカナメカナメカナメ。」

「違う!母さん!僕は!」

「要君!やめなさい!!!」

先生の声で正気に戻った時には、鏡は粉々に割れていた。自分の拳が固く握られて、ぬるりと生暖かい感触がした。

すべてのカーテンを閉め終わる。ポツリ、ポツリと雨音が聞こえ始める。

「僕は、、、。」

きつと、心の奥底で望んでいたんだ。あの暮らしの終末を。自分の手を汚さないですべてが変わるのを。体よく汚れ役を弟に押し付

けたのは僕自身。

「ごめんなさい。」

二度と許される事のない罪。謝るべき相手は、もうココにいないのだから。分厚いカーテンを両手で握りしめる。そのままカーテンに額を寄せる。冷たい窓の感触がする。このカーテンの裏に映るのは、まだ僕なのか。

「それは、勘違いじゃないか？」

「?!」

振り返ると、司が立っていた。左手には箸が妙な形で握られている。頭には、モスグリーンでゾウリムシのような模様、ペイズリー柄のバンドナ。緑を基調にした明細柄のTシャツにブラックジーンズ。素足に履くスリッパがバンドナ型で気が抜ける。

「何が？」

司の目の位置までかがみ込む。司の瞳の奥に自分の姿が映る。

「だって、お前の母さんはツカサを止めなかつたんだろ？」

「え？」

「母さんも、力があつたんだろ？ だったら、死にたくなら自力でツカサを止められただろ？」

「、、、。」

窓の外の雨の音が激しくなる。窓が軋んだ音を立てる。

「だったら、母さんは殺されるとわかっていて止めなかつただろ？」

「!?!」

窓の外で雷が流れ落ちる。耳を劈く轟音に空気が震える、部屋の照明が何度か点滅する。

「だから、お前が気に病む必要はないんじゃないのか？」

永遠に続くメビウスの輪の後悔にヒビが入る。ずっと悩んできた

事。ずっとずっと悩んできた事。

「そうなのか、な？」

わからなくなる。突然示された別の可能性。

「さあね。知らない。」

司が軽いノリで首を傾げる。

「それよりさ、スプーンくれない？コーンがうまくつまめない。」

「、、、あ、、、うん。わかった。」

まあ、難しい事は後でも考えられる。台所へとスプーンを取りに行く。後で考えればいい。母さんの事も、司には母さんの話なんかした覚えがない事についても。

もう、母さんも弟もここには居ないのだから。僕が何を考えようと真実はわからないのだから。

日常は水のように、心の色を痛みを薄めてくれる。雨は何もかも曖昧に。にじんで隠してくれる。

19 会話

雨が降る。雨が降ろうが気ままに紫陽花が咲く。

会話

雨だ。今日も雨だ。雨が降ると洗濯ができない。

しっかりとカーテンを閉じて、途切れる事のない水音に耳を澄ます。

「要。ちよつといい？」

「ん。何？」

司が、改まった口調で少し緊張したような顔をして目の前のソファへと座る。バンダナはモノクロのトランプ模様。1カ所だけハートのエースのマークが赤い。白いTシャツに黒い半ズボン。

「この前、勝手に出掛けてごめん、なさい。」

あの火事のあった日から一週間と2日。何も話したくないならそれで良いと思っていたけど。

「いや、僕の方こそ勝手について来て、騒ぎを起こしてすまない。我ながらどちらが保護者なんだかと思う位の失態だった。司は軽く頭を左右に振った後、両肘を机の上について両方の指を交互に組ませる。」

「あの時、アイツの気配がしたんだ。」

「アイツ？」

「そう、アイツの。」

司の言うアイツとは誰なのか？

「そのアイツを探しに？」

「うん。でも、間に合わなかった。」

「ごめん。僕が引き止めてしまったからか。」

「要が引き止めなくても間に合わなかった。」

「アイツって誰？」

「、、、。」「

答えたくない、、、か。

「僕が探そうか？」

特に何も考えずに、そう言っていた。

「え？」

司は、鳩が豆鉄砲をくらったような顔をした。

雨の音がする。雨が地面に落ちる音。

紫陽花の色が変わる。咲いている間に少しずつ紫が濃さを増す。

紫陽花の花びらに見える部分は、本当はガクだ。花はその中心の小さな部分のみ。紫はガクに溜まる色素の色。ガク自体の色ではない。それは器でしかない。中身の色が変われば、外側の色も違って見える。

僕らの何が変わったのか。それとも変わって見えるだけのまやしなのか。

要が、そんな事を言うとは思わなかった。

要が、それくらいなんなくできそうな事さえも思いつかなかった。

でも、それでいいのか？いや、それがいいのか？

「あ」

要が、何かに気がついたようにポケットから携帯電話を取り出す。いつも手元に置いたり、持ち歩いているが一度もかかってきたしがない。無言のまま、二つ折りの本体を開いて液晶画面をじっと見つ

める。

その途端「リリリンッ」と鈴のような音が聞こえた。携帯電話が鳴り出した。要が通話ボタンを押す。受話器の向こうからは女性の声が聞こえた。

20 赤と紫

赤、赤紫、紫。土の酸性度によって紫陽花の色が変わる。

赤と紫

「もしもし」

聞き覚えのある女性の声。教授の元助手の真野沙織さんからだ。頭脳明晰で容姿端麗、しかし科学で解明できない現象はないと信じていた女性。教授は、そのどこまでも認めずに疑う姿勢が逆に研究に役立つと考えた。彼女もまた同じように考えて一時期協同で研究をしていたが、半年余りでその関係は決裂した。

「お久しぶりです。真野さん。」

「え？ええ。要君？」

声だけで相手がかかるのは常人離れていたか。それとも教授の携帯に僕が出たからだろうか。

「ねえ、悪いけど教授に代わってもらえる？」

ああ、そうだ。この人にも連絡してなかったんだった。

「連絡してなくてすいません。教授は半年前に亡くなりました。」
受話器の向こうで、息を飲む音が聞こえる。この人ならこの意味がわかるはずだ。この人はそれが嫌でこの館を去ったのだから。

「そう、、、とうとう、、、でも、どうしようかしら？」

「何かあったんですか？」

何も用がないのに、彼女が電話をかけてくるはずはない。そういう人だ。

電話口で話そうか話さまいかの葛藤を感じる。このまま、切られるならそれで良い。

「要君だけでも、話、聞いてくれるかな？」

疑うような、期待するような問いかけ。あの頃と何も変わらない。僕を子供扱いする。

「ええ。でも、お役に立てるかどうかはわかりませんよ。」

「そうね。今もあの館にいるのよね。じゃあ、そっちに伺うわ。」

「ええ。気をつけて。」

時間を決めた後、そう言って携帯を切る。そう、気をつけて来なければ何かあるかはわからない。この館に近づくと、そういう危険に自ら飛び込むと言う事。

自ら逃げ出した場所に助けを求めるなんて、よっぽどの事なんだろうとぼんやりと思う。

「これ、見て欲しいの。」

屋敷に着いた彼女はレインコートも脱がずに一枚のDVDを見せる。虹色の幾重にも重なる銀色の円盤。

「2階にまだプレーヤーがあるわよねえ？」

レインコートを無造作に玄関に放り出して、勝手に2階へと上がっていく。何をそんなに焦っているのだろう？ともかく、部屋へとついて行く。

「要」

一緒に来てもいいか？司が目でそう言っている。

「ああ」

それだけ答えて階段を上がる。司が後ろから付いてくる。

映像には、ひとりの女性が映っていた。何も置いていない白い小さな部屋。

その中央に俯いて座り込む姿。水の入った透明なコップが床に置いてある。しばらくはそのままの光景が続く。音声は入っていないようだ。画面右下に表示された日付と時間表示がなければ、画面が

止まっているように見える。日付は昨日。そのまま見ていると水の入ったコップの水面が揺れ始めた。まるで生き物のように、ゆらゆらと波紋を描く。少しずつコップ自体が揺れ始めて、やがて水面は波打ち水滴を床へとバラまき始める。コップの揺れが一段と激しくなり、ついにはいくつかの破片へと別れて床へと散らばった。コップはアクリルか何かのプラスチックのようで、ガラスのように鋭利には砕けていない。

まるで、こうなる事が予想されてその場所に置かれたみたいだ。カメラの画面が揺れ始める。細かい揺れが段々と大きな揺れに変わる。突然、部屋にいる女性がこちらを向いた。正確にはカメラのレンズの方を。そして、その直後、、、部屋の壁が崩れた。

音のない世界で一瞬のうちに左側の壁が女性へと倒れ込み、その姿を覆い隠した。直後に視界が大きく揺れた後、画面は砂嵐へと変わった。

「ポルターガイストですね。」

物が触ってもいないのに勝手に動く現象。こういった事例は今までもたくさんある。教授も彼女もよく研究していた。彼女は、電磁波や共振現象の一種だと当時言い張っていた。

「そうね。」

「この女性は？」

「壁の下敷きになって左腕を骨折。今は病院よ。」

「そうじゃなくて、この女性はあなたの」

「ええ、私の、、双子の妹。」

彼女の研究は、不可解な現象をどう否定するかに偏っていた。対処法の知識はない。

「妹、早苗の力を止めて欲しいの。」

同じ場所で、同じように育ったのに。なぜ、片方にだけ能力が宿るのか。

21 抜け

ぐるぐると回るスパイラル。痛みも安らぎも回転が早まって。少しでも上へ進んでいるのかい。

抜け

真野さんが、少しだけ早口に今までの経緯を話し始めた。

「早苗の周りで物が動くようになったのは、半年前。

突然母親が電話をかけてきて、見に行ったらその時は興奮した時だけ物が少し動く程度だった。

私は本格的に調査しようと言っただけで、早苗本人が嫌がったからその時は引き下がったわ。

症状は日常生活に問題が出るほどとも思えなかったし、子供でも思春期でもない。

この年で今以上力が増す可能性はほぼないと私は判断したの。

でも、月日が経つにつれ力が増して、3ヶ月後に早苗本人から電話が来たの。

『沙織、助けて』って。その頃には、もうかなり酷い状況になってた。

私は、自分なりにいろいろ考えて調べたりしてみたけど、現実は何も変わらなかった。」

「その時には、なんで屋敷（いし）には来なかつたんですか？」

それだけは聞いておきたかった。なぜ発現時ではなく、今なのか。もっと前に相談されれば、もしかしたら何か早めに手が打てたかもしれないのに。教授の研究は非人道的だった。でも、それなりに結果も出ていた。

「教授は、特殊な能力があるとされる人間を実験対象としか見てい

なかった。あなたの事も。

私は妹をモルモットのよう扱われなくなかった。だから来たくはなかった。

でも、このままでは早苗は生活どころか、怪我をして死んでしまう。

なんかこういうの、因果応報って言うのかしらね。能力を否定してたバチなのかしら。」

「あなたらしくないですね。バチなんて非科学的ですよ。」

「そうね。でも、要君、教授と同じ事言うのね。教授と話してるみたい。」

そう言っただけ疲れたように、少しだけ笑う。教授と僕のどこが同じだと言っただろう。

「あと、能力が発現したきっかけに心当たりは？」

「ないわ。臨死体験や精神的にショックな事もない。家系的なものもからつきし。」

恋愛関係もないし、いかにもな心霊スポットに行ってもいない。

まあ、本人の自覚がないだけで、何かあるのかもしれないけど。

要君、どう思う？力をなくす、またはコントロールできると思う？」

「あれは、あの娘の力じゃない。」

「え？」

ずっと黙っていた司が口を挟んだ。彼女の動きが止まった。ギクシヤクと僕の方を見る。その顔が引きつっている。どうやら今まで司の存在に気がついていなかったらしい。

「真野さん、紹介が遅れましたが彼は司。屋敷に住んでいます。」

数秒間、司と僕を代わる代わるに見比べた後、やっと口を開く。

「要君、、、この子、いつから部屋に居たの？」

「あなたが玄関に来た時から。」

真野さんが急いで説明するんで、紹介し損ねただけです。」

「そう、、、。ええと、ごめんなさいね。司君？」

司は不快そうに少し目を細めて、もう一度同じ事を言う。

「あれは、あの娘の力じゃない。」

「それって、どういう事？」

確かにあの娘が動かしている感じがしない。彼女の中にある別の何か溢れるような。

「、、、どこかで、、、混ざってしまったんだ。」

「何が？」

彼女の問いかけに、司が顔をしかめる。

「あれは、、、。」

戸惑うような、怯えるような瞳の色。左手で自身の胸元、Tシャツを強く握りしめる。

「あれは、、、。」

そう言って視線を床へと落とす。

柱時計の針がカチカチと進む。床に映る影が少しずつ位置を変えていく。

司はそれ以上何も話そうとしない。

「、、、司君？」

とつとつ耐えかねて、真野さんが呼びかける。司は俯いたまま、強く首を振った。

「、、、あれは、、、アイツが、、」

もう一度司が何か言おうとして、その時、柱時計の音が止まった。

代わりに部屋のモニタが一斉にブウンツと鈍い音を立てて起動する。この部屋の画像解析用のモニタ8台すべてが。

「どうしたの？要君？」

「真野さん、静かに。大丈夫。」

悪意は感じない。ただ、何かが来ている、いや、遠くと繋がっている？

8台のモニタに次々と画面が映し出された。白い部屋、おそらく病院の個室。先ほど見た映像と同じ女性の姿。画面右下には日付と時間表示。日付は今日。時刻は今。画面の中の女性がこちらを見つめる。何かに怯えるように時々周囲をチラチラと伺う。そして音のない画面で女性の口だけが動く。声は聞こえない。何度も何度も同じ言葉を繰り返すように、まるで画面の中から助けを求めるかのよう。画面の中のカーテンが揺れる。窓際の机には白い紫陽花の花。画面の端に誰か子供の人影が一瞬映り込む。

次の瞬間、カメラの角度がガクンと変わる。ベットの全面を見下ろす形になる。こちらを見上げる早苗さんの顔は恐怖に引きつっている。ベットから降りようとした女性の動きが不自然に止まる。薄い掛布団が体を束縛するように絞まる。見えない何かに押さえられるように、体が仰向けにベットへと転がる。何かを叫ぶ。掛布団が体を絞め付ける。もがく手がシーツを握りしめる。時折体が上下へと弾む。布団が絞め付ける部分にジワリジワリと赤い色が滲み始める。

だんだんと体が細くなっていく。シーツに食い込んだ指に血が滲む。雑巾を絞るかのように、上半身と下半身が逆方向にねじれていく。だんだんと中身を絞り出すかのように。赤い、赤いシミが少しずつ広がっていく。

そんな映像が3分と23秒。ついに体は動かなくなった。

胸部から腰の辺りまでが砂時計のようにくびれた状態で。

掛布団は深紅へと染まり、シーツもまた同じ色に染まっていた。

そこで、画像が途切れた。ただ、ただ、暗闇を映すモニタだけが残った。

ぐるぐると回る朝顔の蔓。無駄に無駄に何度も遠回りをして。じわりじわりそれでも上へと這い上がる。

すべてはいつかは終わる。嬉しい事も悲しい事も。いっそすべてが止まってしまった方が幸せなのか。

22歌

真野さんがアクセルを踏み込む。ワイパーで拭っても拭っても雨が視界を歪める。

歌

僕は、早苗さんのいる病院へ向かっていた。屋敷こに来るのに乗ってきた車で。運転は真野さん。後部座席に僕と司。

はつきり言つて車は嫌いだ。匂いが嫌だし、揺れも最悪だ。車酔いも酷い。

病院はもつと嫌いだ。生と死、愛憎が溢れる病院には、普通の人には見えない何かがあって、たくさんの意識が混ざる。でも、司が行きたいと言うから一緒に行く。司は早苗さんが死んだ原因に心当たりがあるみたいだ。

今行けば、何か居るのか？何か起こるのか？

かなりのスピードで車が直角に曲がり、体に遠心力がかかる。胃の辺りがムカムカする。口の中にじわじわと唾液が満ちてくる。大丈夫。病院はそんなに遠くない。なんとか耐えられる距離だ。司は左手で胸元のTシャツを握りしめたまま。険しい表情で前方をじつと見ている。その内にあるのは迷い？戸惑い？それとも恐怖？シャツに爪が食い込む。

「司、平気か？」

呼びかけには、気がつかない。青紫の唇、歯がガチガチと鳴る。呼吸が早い。

「司、落ちつけ。」

座席に置いたままの右手に僕の左手を乗せる。ギョツとしたように司がこっちを見る。ビクリと右手が震える。司の手は熱い。元々子供は体温が高いが、今日はより熱い。脈拍が早い。

「焦っても何も変わらない。落ちついてくれ。」

もう一度眼を覗き込むようにゆっくりと話しかける。固い表情のまま、司がギクシヤクと頷く。シャツを掴む力が少しだけ抜ける。司がこれほど気にかけるモノとはいったい何なのか？真野さんが運転がてらに電話を病院にかけている。どうやら繋がらないらしい。

車が病院の駐車場へと入る。適当に駐車して真野さんが病院の建物へと走る。鍵もかけずに。司が無言でその後を追う。僕も急いで車を出る。雨の中、病院の建物へと走ろうとした足がその場で止まった。急いでいたとはいえ、迂闊だった。駐車場とはいえ、ここはもう病院の敷地だ。

雨が波紋を描くアスファルトから、たくさんの白い腕が生えていた。半透明の腕。それらがゆらゆらとこちらに寄ってくる。声無き声が聞こえる。家に帰りたい。連れていっておくれ。腕が僕の足首を掴む。ひとつひとつの腕は弱々しい。しかし、こつ多いと。

真野さんと司は病院へ入っていつてしまった。早く僕も行かないと。試しに、その場で軽く拍手かshわてを打つ。僕を中心に水たまりが波紋を広げる。同時に腕達が嫌な甲高い声をあげて次々と砕け散る。しかし、次の瞬間、地面から新しい腕が少しずつはえてくる。霊が、思いが多すぎる。きりが無い。

少し走った所でまた、足下が腕だらけになり進めなくなる。やはり、少し時間はくうが確実な方法をとるしかなさそうだ。心を落ち着けて、目を瞑る。より一層腕が増えて、腰の辺りまで腕まみれになってきた。一度深く息を吐く。ゆっくりと肺の空気をできるだけ。

そして静かに小さな声で歌い出す。

ドボルザーク作曲の「新世界から」。

堀内敬三の歌詞で。

日本語曲名は「遠き山に日は落ちて」。

ゆっくりと、ゆっくりと、子守唄のように。

腕達の動きが治まり、体を掴む力が抜けていく。

だんだんと半透明が透明へと近づいてくる。

そのまま2番へと続ける。

腕達が次々と消えていく。

帰りましたまえ、愛しき人の元へ。安らかに眠りましたまえ、苦しむ体はもう存在しない。音もなく、声もなく。静かに思いも姿も消えていく。やがて、最後の腕が消えて、周囲に雨の降る単調な音が戻ってきた。

霊達は思いが弱くなれば、自身の存在が保てずに崩れ消えていく。心に働きかける。思いを弱めて、存在を抹消する。一般的に浄霊、成仏させて消す行為だ。力任せに霊を砕く、除霊と違って気持ちいを共振させれば効果は広範囲に及び、取り残しが出にくい。霊といえど元は人間だ。人が安らぐ言葉、歌は気持ちいを動かしやすい。

仏教ならお経を、キリスト教なら聖書を使うように。僕は無宗教者なので、好きな歌を使う自己流だ。

すっかりずぶ濡れになった重い服で、建物へと向かう。だいぶ時間^{トケイ}が経ってしまった。通路にかかる金属アーチに絡まるように時計草^{ソウ}の花がたくさん咲いている。時計草の雄しべの部分、時計の長針、

短針、秒針に見立てられる部分は、けして動かない。すべて止まったままの時計ばかり。虫達の往来でやがて、針は折れてしまう。あれは美しいだけの飾り物。

23ふたり

建物の玄関口から拍手が聞こえた。玄関の軒先に、少年が立っていた。

ふたり

雨と風が激しくなる。顔を濡らす雨が目に入って、視界が滲む。

「凄いね。あんなにいつぺんに消すなんて。」

口元を笑いの形に歪めて。

この声、この口元、この体格、この動き。白いTシャツにトラップ模様のバンドナ。癖のある髪、そして猫のような好奇心の瞳。司は病院の中に入っていった。だから戻ってきたのか？でも、姿も素振りも同じ。なのに何かが違う。ここにいるのは。

「君は、誰だ？」

僕の言葉に少年が少しだけ目を細める。それは訝るような、不快な時の仕草。違和感、僕にしては珍しくその違和感の原因が何なのかわからない。

「要？何言ってるんだよ。どうかしたの？」

少し困ったように首を少しだけ傾げる。少年の行動に僕は眉をひそめる。やっぱり違う。疑惑が確信に変わる。

司は、司であれば、、、きっと、悲しそうな顔で黙ったままこちらを見るだろう。

空が激しく光る。稲妻が走る。重なるように轟音が鳴る。雷雲が近い。何か諦めたようにため息をひとつ吐くと、濡れるのも構わずこちらへと向かってくる。そういえば、少年の髪や服は濡れていない。司はさっき濡れたばかりだ。

「なぜ、わかった？」

冷たく低い声で問いかける。猫のようにじっとこちらの目を覗き込んで。

「なんとなく」

「何が違う？」

「わからないけど、違うのはわかる。」

「これ、あげるよ。」

後ろに隠し持っていたのか。白い紫陽花の切り花。しかし、白い花は赤く染められていた。雨の中、受け取った花から薄い朱の色が流れて指に絡んでいく。

「早苗さんを殺したのは、君か？」

早苗さんの部屋にも、白い紫陽花の花。それに、この少年からは血の匂いがする。

「そつだよ。」

自分の指先に残った血をチロリと舐める。さも、当然のように、愉快そうに。

彼が司の言っていたアイツなのか？

でも、、、司が殺したのでないなら、それでいい。

司そつくりであっても、司でなければ関係ない。

「じゃあ、僕も病室に行くから。」

急速に関心が失せて、逆に病室に向かった司の事が気ばかりになった。車の中では様子がおかしかったが平気だろうか？

しかし、その言葉と同時に少年の様子が急変した。

「待てよ！あんな奴どうでもいいだろ！」

横を通りすぎようとした僕の腕を掴む。そこには溢れる怒り。

「君の事は興味深いが、今は司の方が気になる、離してくれ。」

「嫌だ！あんな臆病者のどこがいいんだ！俺の方が力だっつてなんだっつて強いのに！」

「？」

言っている意味がわからない。しかし、ニュアンス的にはもっとかまっつてくるとせがむ子供のような。

「要！」

視界の向こうから、司の声が聞こえる。

「お前も死んじゃえばいいんだ！」

目の前の少年の瞳が赤く光る。掴まれた腕にビリリと痛みが走る。周囲の空気が変質する。眼鏡にヒビが入る。マズい。これはマズい。

「ちよつと、待つ、、、！！！」

言い終わらない内に、視界が揺らぐ。風景が揺らめいて、酷くめまいがした。

「要！」

声が聞こえる。世界が回る。雨の音が聞こえる。水たまりを蹴散らして走る水音が聞こえる。

「要！」

司が僕へと駆け寄る。

「、、、大丈夫。なんとか。」

頭が割れるように痛くて、視界が揺れるがそれ以外は問題ない。

「なんで、、、どうして、、、」

少年が両手で顔を押しさえる。指の間から赤い筋が流れた。白いシャツを赤へと染めていく。

普段から力を押さえ込んでいた僕の場合、外から力が加われば容易く力が外へと溢れ出す。だから、力を僕に向ける者は即座に酷い報いを受ける。この現象がなければ僕はもっと早くに死んでいただろう。無意識に僕は自分を守るために他者を傷付ける。司が僕を心

配そつに覗きこんだ後、少年へと向き直る。

「どういうつもりだ。」

司がゾツとするような声で、少年に問いかける。怒りも露に威圧感を放つ。雨が激しく体を打つ。突風に煽られるガラス達が悲鳴を上げる。

「うるさい！なんでお前ばかり！お前だって俺のくせに！」

少年が顔を上げる。鮮血が涙のように両頬を濡らす。

同じ顔、同じ髪、同じ服、同じ声。でも違う。心が違う。癖が違う。

「お前は、、、違う、、、自分、、、とは違う。」

司がゆっくりと確認するように、言葉を選ぶ。

「己おれは司。お前は司じゃない。」

稲妻が空を切り裂く。音もなく、世界を白く染める。だいぶ遅れて轟音がやってくる。

「過去は同じだった。でも、今は違う。」

要の側にお前は必要ない。

己おれにもお前は必要ない。」

少年の顔が歪む。悲しそうに。捨てられた子猫のように。

「嘘だ。お前にだって力は必要なはずだ！俺の力が！だから、こつやっつて集めてたんだ！」

ズボンのポケットから深紅の色の小石をひと掴み取り出して掲げる。血の色の石。血の匂いがする。

「いらぬ。どうでもいい。」

司が目を細める。蔑むように視線をそらす。猫が興味を失ったおもちゃに見向きもしないように、踵を返して僕の手を握る。

「要、病室に行こう。あの人待ってる。」

「え、ああ、いいのか？」

「いい。」

司は逃げるように、僕の手を引っ張って強引に病院の建物へと誘う。雨の中、少年をひとりきり残して。

雷は、かみなり空気中の窒素を大地へとたたき落とす。土に落ちた窒素は養分となり、植物を育てる。だから、雷の多い年ほど作物、特に稲は豊作となる。だから稲妻、稲の妻と呼ばれる。雷は、畏怖の対象でありながら、感謝と敬意をも持たれている。司が砕いた少年の何かは、新しい何かを育てる事ができるのか。

24 断絶

ひっぱりあげようとするれば容易く千切れる地下茎。
千切れては地中に残り、しぶとく蔓延る（はびこる）ドクダミのよ
うに。

断絶

「なんなんだ。どうなっているんだ、なんで。」

俺は、例の赤煉瓦の屋敷へと早足で向かっていた。どう考えても
おかしい。

今日突然に、病院での女性変死事件の捜査は打ち切りとなった。
明らかに殺人だと思われるのに、犯人は見つかっていないのに。現
場捜査で、銀髪と小学生くらいの子供が目撃された。そのモニター
ジュイラストを上層部に提出した途端に。どこか上の組織が圧力を
かけている、そんな感じだ。

しかも、ついさつき被害者の女性の姉の訃報が入ってきた。駅の
ホームからの飛び降り自殺。妹を失ったシヨックからだろうと説明
されたが、それもおかしな話だ。彼女は「妹の仇は必ず見つけ出す」
と涙ながらに語っていたのに。

「噂なんかじゃない。」

銀髪の言葉。呪いの館、近づく^と死を招く屋敷。本当に噂ではな
いのか？

チンピラの恐喝事件、桜並木での殺人事件、ヴァイオリンコンク
ールの不信死、児童の誘拐殺人事件、謎のガス爆発事件、そして今
回の病院でも事件。関係するのは、銀髪とバンダナの少年の姿。

「ともかく、もっと詳しく話を聞けば何かわかるはずだ。」
小走りになりつつ、道を急ぐ。

「おっとすまない!」

曲がり角から出て来た少年にぶつかりそうになって慌てて避ける。
「いいえ。どういたしまして。」

少年がこちらを見る。こんなに天気がいいのに、パーカーのフードを目深に被って、こちらを見る顔に見覚えがあった。

「おじさん、噂じゃないんだよ。」

少年がニヤリと笑う。そう、病院のモニタージュと同じ顔。猫のような印象的な瞳。

「お前は!?!お前は誰なんだ!お前が彼女らを殺したのか!?!」

「そっだよ。」

正解!と、ニツコリと満身の笑みを浮かべる。

「でもさ、あんたは真実を知ってはいけないんだ。だからさ、死んでくれる?」

「は?」

「懐に拳銃が入ってんだろ?刑事さん。」

「おい?」

上目使いに、低い声で悪魔の囁きを呟く。

「それで頭ぶち抜けよ。今すぐ。」

「何を言っ!?!」

俺の手が勝手に懐へと動く。スムーズに拳銃を取り出す。自分の体なのにまったくコントロールが効かない。

何もかもがスローモーションに感じた。どこか遠くで鳥の鳴く声が聞こえて、見上げた空はとっても青く綺麗で、もう一度、俺の上にも空があった事を思い出した。

「そうか、噂じゃないんだな。
それだけは確かに分かった。」

次の瞬間、耳元で激しい銃声が聞こえた。

引き抜いても引き抜いても無くせないドクダミ。罪のように重く、
何度でも根を伸ばし心を絞め付ける。やがて紫がかった葉が茂り、
白い綺麗な花が咲くよ。

25 昔

自分の悲鳴さえも気が付けないあなたに。

自分の影にさえ怯える自分に。

すべてが怖かった。何もかもが。

歩き出す事も逃げる事も出来ずに、ただそこにしゃがみ込んで。

昔

自分が他の人とは違う事に気が付いたのは、言葉が話せるようになった頃。

「あれは誰？」

「誰もいないじゃないの。」

みんなにも見える人と、みんなには見えない人がいるんだ。

「これでしょう!」

「なんで言わないのにわかるの?」

みんなにも聞こえる声と、みんなには聞こえない声があるんだ。

「、、、。」

「やだ、なんで電気が勝手につくの?」

みんなは触らないとできない。自分は触らなくてもできる。

「どうして?なんで?」

その問いに答える者はなく、

「やめなさい。見なかった事にしなさい。」
「気持ち悪い。」「来るな。」「怖い。」「
違う事は「イケナイコト」
違う事は「コワイコト」
みんなそう言うんだ。

悲しかった。だから、一生懸命隠した。
聞こえていないよ。
見えていないよ。
触らないとできないよ。

だから、側にいて。怖がらないで。

でも、それはうまくいかなかった。
自分が困った時や、誰かを助けたい時。怪我をしそうな時。
そんな時に、「力」を抑える事ができなかった。

みんなが自分を避けて怖がるようになった。
優しく声をかけてくれる家族の心の恐怖が聞こえる。
耳を塞いでも、それは聞こえてしまう。
声さえ聞こえなければ、
綺麗な嘘に溺れる事ができれば、少しはマシなのに。

部屋の隅に座り込んで、誰も来なければいい。
ここで死んでしまえばいい。
自分さえいなくなれば、何もかもが終わるはずだと。

しかし、自分は終わりにさえもならなかった。

何も食べなくても、何もしなくても、
自分は終わりにはならなかった。
まどろんでは怖い夢を見て、
目が覚めると自分はまだ生きていた。

夢はとてもリアルで、恐ろしかった。

夢の中で自分はその手でゆっくりと家族を殺すんだ。

「すべて、お前らの所為だ！」

「お前らが悪いんだ！」

その体が動かなくなってしまうと途端に
悲しくなつて、後悔が訪れて何もかもがわからなくなる。

わからない事だらけの自分には、

それがおかしい事だともわからなかった。

何日経ったのかなんてわからなかったし、
もしかしたら、もう死んでいるのかも。

明かりの消えたこの部屋に来る人はなく、
周囲に人の気配はしなかった。

閉められたままの雨戸からは何も聞こえない。

その真実に気が付いたのは、1枚のメモ。

ある日、目が覚めると床にメモが置いてあった。

「地下室へ来い」

そう書かれた。自分自身の筆跡で。

なぜか行かなければいけないような気がした。

フラフラと部屋を出る。

部屋にも廊下にも埃が積もっている。

やはり人の気配はない。

家族はどこかへ行ってしまったのか。

地下室の扉をゆっくりと開く。
中からは明かりが漏れていた。
ぼんやりとした蝋燭の揺らめく光。

そして、そこから漂う異臭。
生き物の腐る臭い。腐臭。

地下室の中には、大小様々な箱。
床に残る重い物を引きずったような跡。
放置された幾つかの凶器。

「みんなずっと側にいるよ。怖がらないよ。」

聞こえたのは誰でもない、自分自身の声。
夢は夢などではなく。

この腕は血にまみれて、家族は残らず箱の中に。
いなくなれば良かったのに。
いなくなるべきは自分だったのに。

だから、もう迷わないように。
だから、もう二度と殺さないように。

自分さえも、箱に詰めてしまおう。

26 彼岸

何も言わないで、何もしないで、ただ、静かに覚悟だけを決めればいい。

彼岸

「司、僕は明日朝から出掛ける。」

午後には帰るから昼ご飯は冷蔵庫に入れておく。」

「出掛ける?」

夜のもう寝る時間に唐突に要が言う。一瞬耳を疑った。

「どこへ?」

酷く外出を嫌がる要がどこに行こうというのか。

「僕の家、、、いや、昔住んでいた家だった、場所。もう建物は無いけど。」

口調は静かだが、言葉に力がなく何度か言い淀む。目が不安げに左右へと泳いでいる。

「なんで?」

要はそこで母親に殺されそうになったんだろ? 弟が母親を殺したんだろ? そして家は燃えたんだろ? そんな家に行く事ないじゃないか。嫌な過去なんて見なくていいじゃないか。そんなの忘れてしまえばいい。

「、、、それは。」

「行かなくていいじゃん。そんなとこ。」

「司?」

顔を見られるのが嫌でベットへと潜り込む。心がざわざわする。何が怖い? 何が苦しい? それがわからなくてぐるぐるする。要が部屋を消して、隣のベットへと入る。窓辺の風鈴がちりりんと

涼しげな音を鳴らす。要の母親は強い力の持ち主だ。あれだけの事があつて死んだから、きつと自縛霊になつてに違いない。そんなのに会つてどうする？

「司、僕は行くよ。ちゃんと、ちゃんと確かめたいんだ。知りたいんだ。僕がここで考えてもわからない答えを。きつと母さんは今もあの場所にいる。」

夏の夜空は雲ひとつなくて、月が明るくて眩しい。こんな事になるなら、あの日あんな事を言わなければ良かった。怖い。怖い。要が変わつてしまつのが、傷ついてしまつのが、、、いや、違う。怖いのは、、、。怖い物には近づきたくない。向かい合いたくない。考えたくない。逃げていいじゃないか。ずっと逃げてきたじゃないか。

空が明るくなるのを待つて、キャスケット帽を被つて、小さい鞆に財布と携帯と薬を入れて屋敷を出る。地図は頭に入っている。何度も何度も行こうと思つて地図を眺めた。何度も支度をしては屋敷の門の前で立ち尽くした。ゆっくりと道を歩く。あんなに悩んでも踏み出せなかつた一步を今は静かに少しずつ進んでいく。僕の何が変つたのだろうか。司の言葉の所為？でも、あれは甘い妄想じゃないかと思う。母さんが許してくれなくても構わない。ただ、真実が知りたい、そしてちゃんと謝ろう。たとえ許してくれなくても。母さんに殺されるならそれもしようがない事。なんかもう悩やむのも逃げるのも疲れた、そんな感じだ。

司は目は覚めているみたいだった。ついてくるかと思つたが起きてはこなかつた。一緒に来てくれる事を少し期待していた自分に気

が付いた。ひとりで行くと決めたのに。

実家のアパートのあった焼け跡は、教授が土地を買い上げてくれていた。僕がいつでも見に行けるように。管理は管理会社に任せてある。日差しがだんだんとキツくなる。数人の人ともすれ違つ。額に汗が滲む。ああ、僕はまだ生きている。母さんも弟も教授も居なくなつた。司は、司はわからない。でも、誰が居なくなつても僕は、まだここに居る。

次の角を曲がれば、目的地が見える。そこで、足が止まつた。何が見えるのか？母さんは？汗が冷や汗へと変わる。指先が勝手に震え出す。今帰れば何も見なくて済む。息が苦しくなる。脈拍の上昇、心因性による過呼吸だ。わかつていても止める事ができない。意識が混乱してくる。体がよるめいて塀に寄りかかったまま、ズルズルと道路へとしゃがみ込む。発作止めの薬を出そうとして靴を取り落とした。落とした弾みで開いた靴の口から薬の瓶がコロコロと道路へと転がる。路地の向こうへ。

この路地を出なければ薬は拾えない。路地を出れば目的地が見えてしまう。

どうする？どうする？いや、違う、もう逃げられない。目を瞑って深呼吸を3回繰り返す、大丈夫、僕は大丈夫。なんの根拠もない呪文を唱える。覚悟を決める。

塀に寄りかかりながら、少しずつ前進する。目を瞑って、思い切つて塀を強く弾いて路地へと一歩飛び出す。そしてゆっくりと目を開く。

「！！」

僕の横を一陣の風が吹き抜けていく。僕はただ無言のまま、その光景を見つめていた。

そこには、一面の血の色の花。彼岸花。

敷地を埋め尽くす赤い花の絨毯。救いを求めて空に伸ばされた腕のような形の花。ただ、それが風に揺らめく。他には何もなかった。何の気配もない。

「母さん！」

敷地の境界に低く張られた縄をくぐって、花の中へと踏み分ける。足下で花達がポキリと細い茎が折れるのも構わずに。

「母さん！出て来て母さん！」

花をかき分けて、敷地の奥まで進む。花は無言のまま、ただ風に揺れる。

「僕は！僕は！僕は！、、、、、、 やつとここに来れたのに！」

ずっと、ずっと、ずっと母さんはここで僕らの事を恨んで、ここで待っているんだと思っていた。僕がご飯を食べる時も、僕が寝ている時も、僕が母さんの事を忘れて笑う時もずっとここにいて、僕らを恨んでいるんだと。教授はそれを知っていて、ここを買い取ってそのまま放置したんじゃないのか。

「なんで、、、どうして？」

質問に答える人はいない。問いは誰にも届かない。答えは二度とわからない。すべての道が閉ざされて僕は空を見上げる。

澄んだ青、白く沸き立つ入道雲、飛行機が飛行機雲を描いて飛ぶ。風に揺れる樹々のざわめき、遠くから聞こえる豆腐屋のラッパの音。ここはただの日常風景の一部でしかない。

しゃがみ込んだ僕の足下で何かがキラリと光る。注意深くそれを拾いあげる。小さなおはじき。透明のガラスに青い線が2本入って、

その片側は熱で溶けたように歪んで変形している。これは、昔母さん
がくれたおはじき。火事の熱で溶けた痕。

届かない手をひたむきに伸ばす彼岸花。その手が届く事はなく。
どこへも行けやしない。

お金で買えない幸せ。でもお金で買える幸せも確かに存在する。

金

交差点に鞆が落ちていた。鞆の口が開いていて中の物が道路に散乱している。近くに人影は見えない。その鞆は結構有名なブランド THUBASA のロゴが入っていた。あたしは、落ちていた鞆から財布を取り出した。財布にも CHUBASA のロゴが入っている。見た事のないモデルだけど本物っぽい。そこからお札を素早く抜き出した。1万円札が3枚、あたしはその3万を持って素早くその場を後にした。財布や鞆は置いて行く。ブランド物は売るときに足が付きやすいから。

「ありがとうございました。」

店員がマニュアル通りに頭を下げる。コンビニで、前から欲しかった艶めき口紅とどっさりのお菓子とついでに猫缶を買っていつもの公園へと向かう。人気のないベンチでこっそり買ったばかりの口紅を塗ってファндеの鏡で確認する。うん、可愛い。なんて今日はラッキーなんだろう。3万も手に入るなんて。いつもは親の財布からこっそりお金を抜くか、コンビニで小さい物をくすねるくらい。堂々と好きな物がこんなに買えるなんて夢のよう。中学生はバイトもできないし。親は成績が悪いからって少ししかお小遣いしてくれないし。袋を開けて、ポテトチップスをサクリとかじる。美味しい。家でうちは体に悪いからってジャンクフードはないし、自分の小遣いは化粧品を買うから、お菓子なんて滅多に食べれない。

「にゃ〜」

足下にいつのまにか三毛猫がすり寄ってくる。いつも、ここに来

る猫。あたしの唯一の友達。いつもは、家でくすねてきた鰹節をあげるんだけど、今日はご馳走。ワンタッチで開く猫缶を開けて足下に置く。

「はい、どうぞ」

猫は即座に猫缶にがつつきはじめた。

「今日はごちそうでちゅよ。美味しいでちゅか〜。」

その毛だらけの背中をゆっくり撫でながら、なんだか幸せな気持ちになる。この子だけはあたしの味方。

親は口を開けば説教ばかり。勉強しろ、学校へ行け、なんだこのテストの点は、良い高校に行かないと承知しない、化粧はするな、夜出歩くな、自分達の世間体が大事なだけ。あたしの事なんて結局どうでもいいみたい。

学校の先生も同じ。ちゃんと授業に出させればオツケーみたいな、問題児を抱えたくない保身でしかない。

クラスメイトはウザイだけ。群れてばかりで、話すのはアイドルやドラマの話ばかり。トイレにさえみんなで連れ立つ。すごい馬鹿らしい。

早く中学生生活が終わればいいのに。高校に行く気はない。でも高校生の歳になればバイトができる。好きな物が買える。それだけが待ち遠しい。

それにしても、、、財布を取り出してお札を数える。あとまだ2万5千円もある。何を買おうかな？何をしようかな？

「ん？」

1万円札の間から、1枚の紙がヒラリと舞い落ちた。

「なんだろ？これ？」

拾ってみると赤黒い紙が切り絵のように人形ひとがたに切り抜かれた物だった。透かしのように幾つもの模様が切り込まれていて、かなり凝

った細工になっている。デザイン的には綺麗だけれどちょっと気味が悪い。持ち主のお守りかなんかかしら？

「これ、なんだとおもいまちゅか。」

猫缶を食べ終わって舌をペロペロしている猫の前にその紙を見せ
てみる。

「フー！！」

「ちよつと！？痛いたつ！」

突然猫が威嚇して指を引っ掻いた。紙の人形はまた、ヒラヒラと地面に落ちた。猫はすごい勢いで逃げてしまった。

「ちよつと、どうしたのよ一体。こんなの猫が恐がる物かしら？」

落としてしまった人形を拾って、もう一度よく見てみる。指に滲んだ血が薄く人形へと染み込む。

「ちよつと綺麗かと思っただけど、いらないわね。」

紙の人形を無造作に破いて、ベンチの先にある池に放り投げた。

「司、ただいま。」

「おかえり。」

玄関のドアのすぐ前で待っていた司に帰宅を告げて、無駄に広い玄関ホールの長椅子にひとまず腰掛ける。玄関先で待っていたのはびっくりしたが、特に変わった様子はなさそうに見える。外はもう夕暮れで遠くでガラスの鳴き声が聞こえる。どのくらいあの彼岸花の中で座り込んでいたのかよくわからないけれど、ひとまず帰ってきた。道路にぶちまけたままだった鞆の中身も拾ってきた。何もなくなっていなくて良かった。落とし物として警察に届けられたら取りには行きたくない。この財布は貰い物だし。白地の皮細工で翼のマークのついた財布。滅多に持ち歩く機会はないけど、それなりに気に入っている。

「だいぶ道に放置してしまったから、財布はすられてるかと思った。

「なんとなく財布のふたつ折りに止められたスナツプボタンをはずして中身を見て、お札が消えている事に気が付いた。」

「どうかしたのか？」

「、、、、札だけ盗まれた。」

「ふうん。」

司が興味なさそうに答える。この家にはお金は腐るほどある。預金も骨董品も大量にある。確かに札が数枚消えた程度どうって事ない。お金がなくて困っている人がいるのなら、その人が使った方がいいだろう。しかし、ひとつ気になる物を思い出した。

「札の間に厄ひとがたよけ人形を入れていたような、、、。」

「ヒトガタ？それはないと困る物なのか？」

「いや、身につけている人の代わりに、厄を受ける、代わりをしてくれる物だから、僕から離れれば僕の代わりではなくて、持った人の代わりにするから平気だ。それに、身代わりであって、それで助かる事はあっても困る事はないはず。」

「どんなヤツ？」

「人の形で、たくさん模様が切り込んである白い紙だよ。」

他の宗教の物を真似て僕が作った物。他の人にあげた物は効果が出たけれど僕自身には効かないようだった。

「さあて、夕飯を作らないとな。」

気を取り直して、奥の部屋へと向かう。そう、あれは害がないはず。ただ、あの人形は長い間この屋敷に置いておいた。屋敷に長く置いた物はたまに変質する。不幸を呼び寄せる物へと。ただの家具が渡る家ごとに火事を引き起こしたり、壺の売られた先で次々住人が奇怪な死を遂げたりする。ただの工場製品が、何もいわくのない物に変質する。

しかし、僕にできる事はもうない。何も無い事を祈る事しかできない。僕が会いに行けば確実にその人は不幸になるのだから。

次の日の朝、公園の池に浮かぶ女子中学生の遺体が発見された。その体は紙でも破くようにデタラメに直線で千切れていた。全身には、複雑に赤黒い模様浮かび上がっていた。ベンチの下で今日も一匹の三毛猫が来ないエサ係を待っている。

作られた欲望の形、金の成る木。体を絞めてつけてまで、外側を飾りたいのか。締め付けたコインの所為で絞まるのは自分の首とも知らずに。いや、知ってもなお、その欲望には逆らえないのか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0107ba/>

クリムゾン・ガーデン

2011年12月31日05時51分発行